

第14回 (令和元年度) 学生生活実態 調査報告書



HYOGO UNIVERSITY OF
TEACHER EDUCATION



まえがき

第 14 回「学生生活実態調査」の報告書をお届けします。これは令和元年度（2019 年度）に実施した調査について、その概要をまとめたものです。

この調査は原則として 2 年に 1 度実施しています。本学の学部と大学院（修士課程・専門職学位課程・博士課程）の学生の生活状況や生活意識の実態を把握し、学生生活の充実に役立てることが本調査の目的です。

調査項目は、通学、食事、学生寄宿舍、施設・設備、課外活動、アルバイト、ハラスメントなど学生生活全般にわたって、100 項目以上の膨大なものになっています。また、自由記述欄を設け、大学への要望や期待について学生の生の声を集めています。

この報告書は、調査結果のダイジェスト版です。読みやすくわかりやすい体裁になっていますので是非ご一読下さい。また、全データの詳細については、第 14 回学生生活実態調査報告書資料編の冊子をご覧ください。

これらの調査結果をもとに、学生の皆さんがより充実した学生生活を送れるように、学生支援のあり方を検討し、大学として計画的に支援の充実に取り組んでいきます。

調査に回答してくださった学生の皆さんに感謝いたします。また、調査の実施に際してご協力いただきましたクラス担当教員や指導教員の先生方、ありがとうございました。さらに、調査結果の分析と本報告書の執筆にご尽力いただいた学生委員会委員の先生方および学生支援課の皆様にお礼申し上げます。

令和 3 年 1 月

兵庫教育大学 学生委員会委員長

笠原 恵

目次

A	基本事項	1
B	就職	2
C	学生寄宿舍	6
D	通学	8
E	食事	9
F	売店等	10
G	アルバイト	11
H	附属図書館	12
I	学生生活等	14
J	課外活動	16
K	国際交流	18
L	交通安全等	20
M	健康	21
N	ハラスメント	22
O	大学への要望等	23
	参考資料	27

A 基本事項

HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

調査に参加してくれた人たち

兵庫教育大学では原則として2年ごとに、学部と大学院(修士課程・専門職学位課程・博士課程)に在籍する全学生を対象に、学生生活実態調査を実施している。今回はその14回目にあたり、令和2年(2020年)1月にアンケート調査を行った。その結果、学部生412名、大学院生404名、合計816名から回答が寄せられた。

調査の回収率は、学部生が61%(前回65%)、昼間大学院生が76%(前回69%)、夜間大学院生が36%(前回44%)であり、例年と同様に夜間大学院生の回収率が低い。全体では61%であり前回の64%と比べるとやや低かった。

表1 学校教育学部

学年	対象者数	回収数	回収率
1年次	169	138	82%
2年次	167	92	55%
3年次	166	83	50%
4年次	172	99	58%
合計	674	412	61%

表2 大学院学校教育研究科(修士課程)

学年	対象者数	回収数	回収率
1年次	155	119	77%
2年次以上	231	145	63%
合計	386	264	68%

表5 修士課程および専門職学位課程(昼・夜別)

対象者数			回収数			回収率		
昼間	夜間	計	昼間	夜間	計	昼間	夜間	全体
427	169	596	326	61	387	76%	36%	65%

表6 総計

学年	対象者数	回収数	回収率
全体	1,324	816*	61%

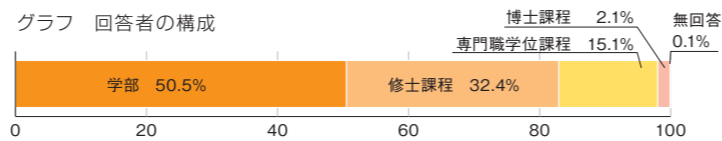
*学年無回答の1名を含む。

表3 大学院学校教育研究科(専門職学位課程)

学年	対象者数	回収数	回収率
1年次	96	55	57%
2年次	92	49	53%
3年次	22	19	86%
合計	210	123	59%

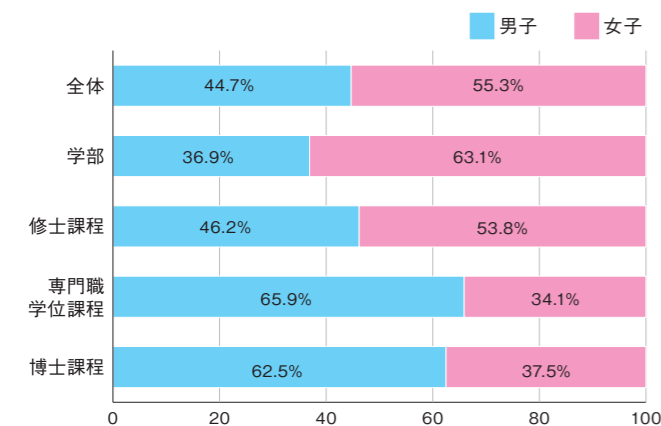
表4 大学院連合学校教育学研究科(博士課程)

学年	対象者数	回収数	回収率
1年次	15	6	40%
2年次	14	4	29%
3年次	25	6	24%
合計	54	16	30%



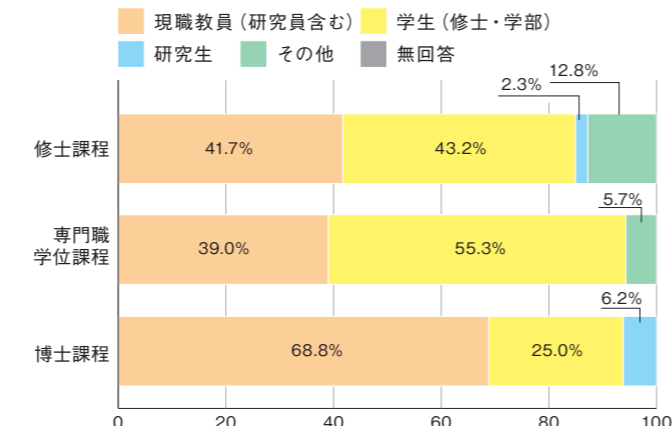
回答者の性別は、学部生では約63%が女子学生、大学院は男子学生がやや多い

グラフ Q: 回答者の性別構成



大学院生のうち現職教員の割合は、修士課程では42%(前回46%)、専門職学位課程では39%(前回41%)で、前回よりやや減少している。

グラフ Q: 大学院生の入学前の状況



B 就職

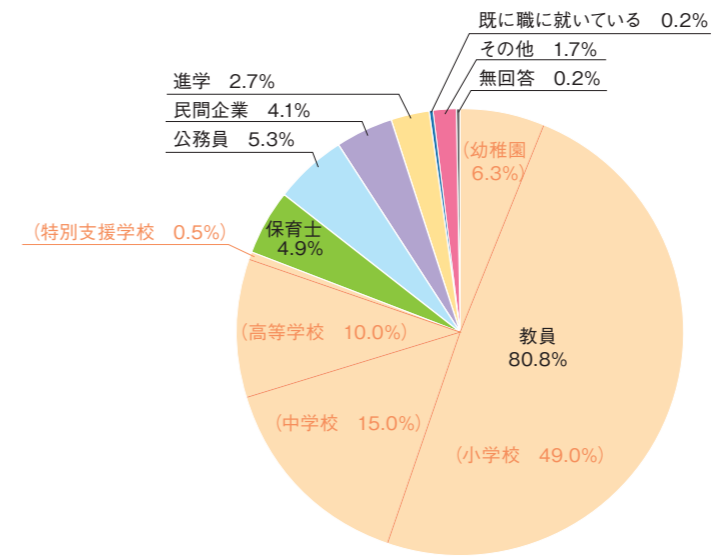
HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

学部生は86%が教員・保育士志望

学部生の教員・保育士志望は86%であった。そのうち教員志望は81%で、前回(79%)からやや増加している。前回に比べると、小学校教員は49%(前回50%)と減少しているが、中学校教員は

15%(前回12%)、高等学校教員は10%(前回8%)と増加している。なお、幼稚園教員は6%(前回9%)、保育士は5%(前回7%)と減少している。

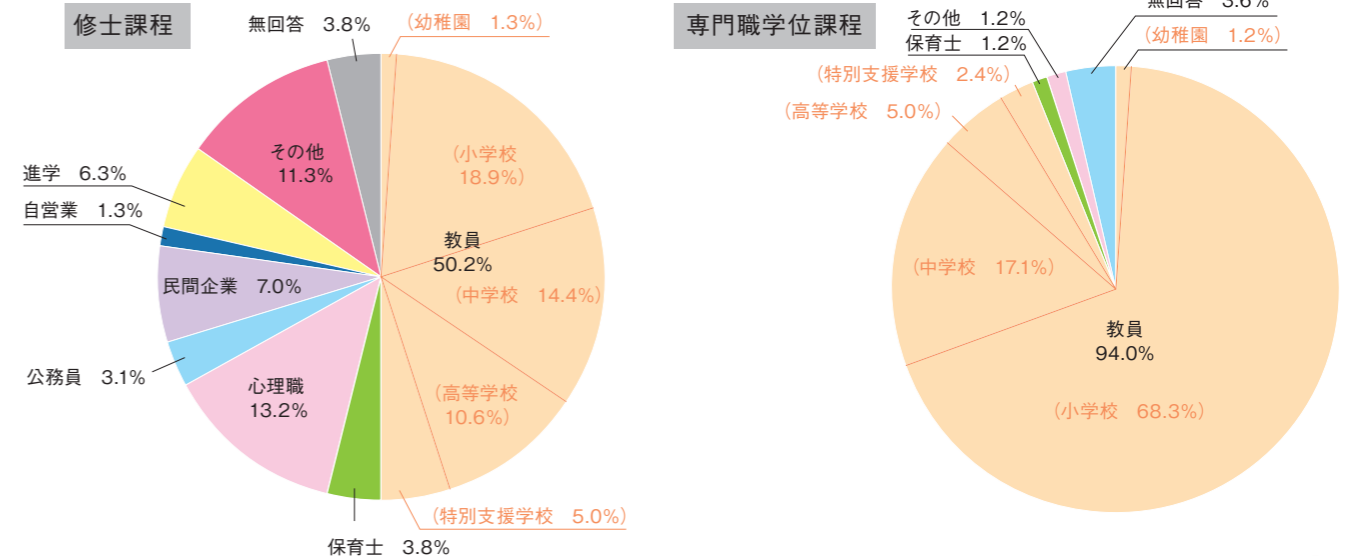
グラフ Q: 卒業後の第1志望進路



大学院生の教員志望者は、修士課程50%、専門職学位課程94%

修士課程の教員志望は、既に職に就いている者を除いた割合では、教員志望が94%であり、前回(94%)と同じ割合である。50%であり、前回(44%)より増加している。専門職学位課程では、

グラフ Q: 卒業後の第1志望進路はなんですか。(職に就いている者を除く)





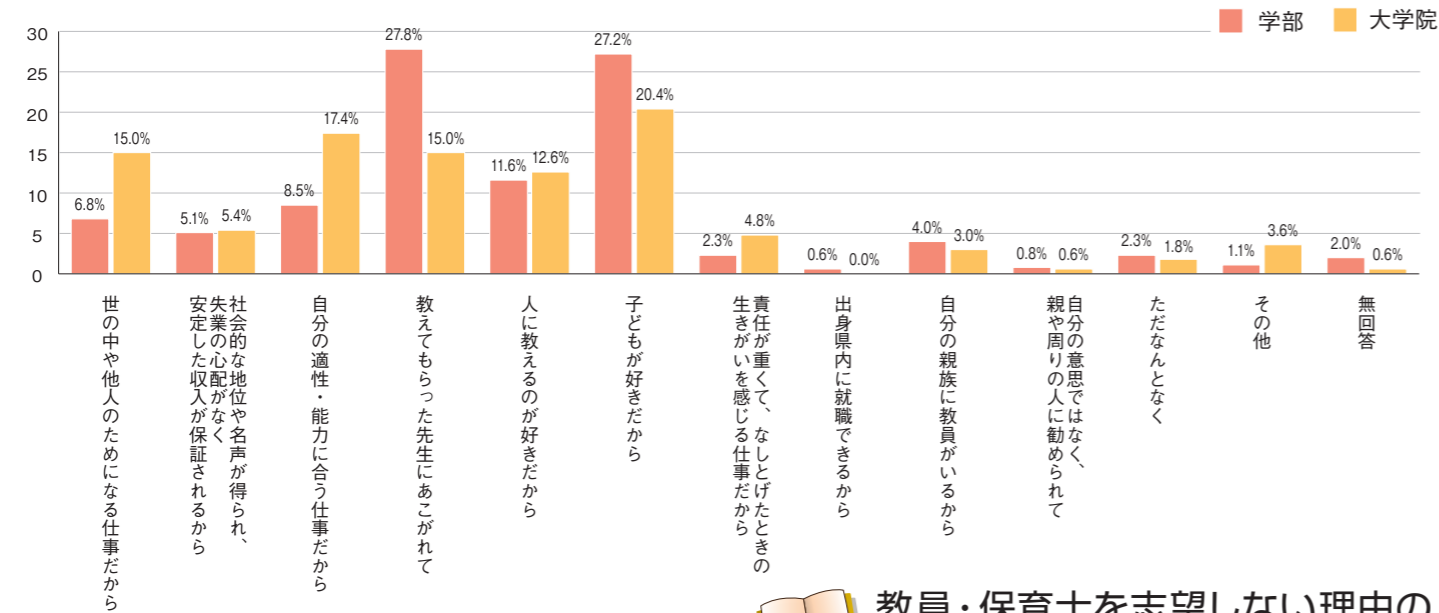
教員志望理由の1位は、学部生「教えてもらった先生にあこがれて」、大学院生「子どもが好きだから」

学部生の教員志望理由の1位は「教えてもらった先生にあこがれて」(28%)、2位は「子どもが好きだから」(27%)、3位は「人に教えるのが好きだから」(12%)となっている。1位と2位はあまり変わらない状況である。

大学院生の教員志望理由の1位は「子どもが好きだから」(20%)、2位は「自分の適性・能力に合う仕事だから」(17%)、3位は「教えて

もらった先生にあこがれて」(15%)、「世の中や他人のためになる仕事だから」(15%)が同じ割合となっている。前回6位の「自分の適性・能力に合う仕事だから」が2位となっており、多少、学部生と違う傾向が見られる。

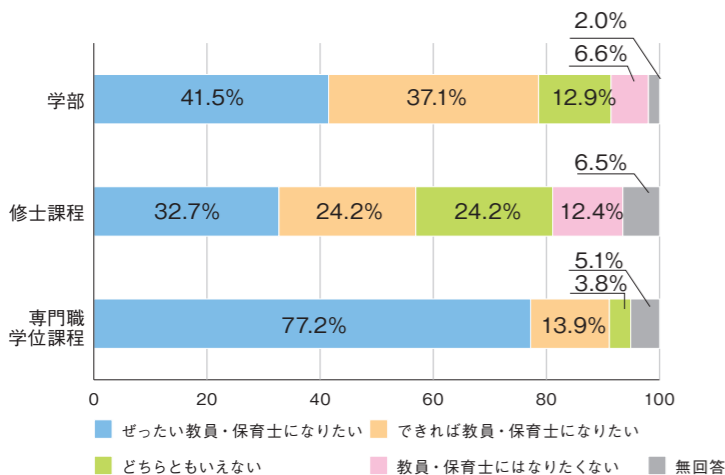
グラフ Q: 教員・保育士に就きたい理由 (教員、保育士に就きたいと回答した者のみ)



学部生79%、修士課程57%、専門職学位課程91%

現在の教員・保育士への志望度は、「ぜったい教員・保育士になりたい」と「できれば教員・保育士になりたい」を併せて、学部生79%、修士課程57%、専門職学位課程91%であった。一方、「どちらともいえない」は、学部生13%、修士課程24%、専門職学位課程4%であった。学部生と修士課程において依然として迷っている者が多くいることが伺える。

グラフ Q: 現在の教員・保育士への志望度

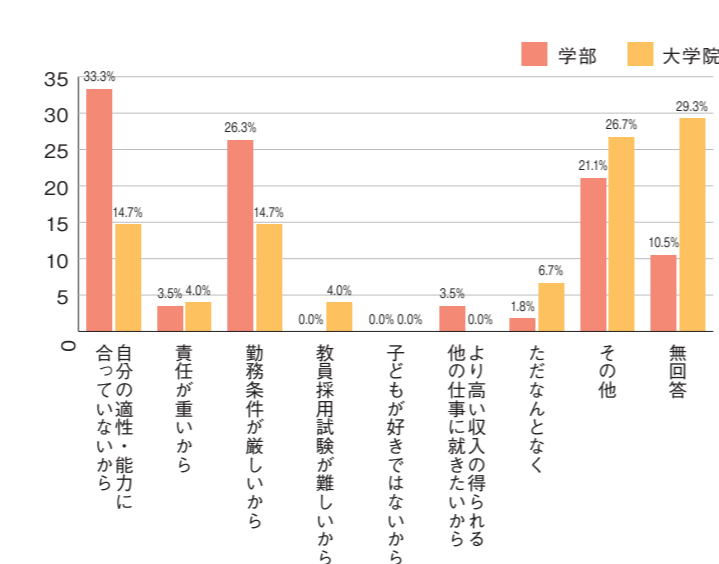


教員・保育士を志望しない理由の1位は、学部生、大学院生とも「自分の適正・能力に合っていないから」

学部生の教員・保育士を志望しない理由の1位は「自分の適正・能力に合っていないから」(33%)、2位は「勤務条件が厳しいから」(26%)となっている。

大学院生の教員・保育士を志望しない理由の1位は、学部生の1位、2位と同じく「自分の適正・能力に合っていないから」(15%)、「勤務条件が厳しいから」(15%)が同じ割合で1位となっている。「その他」(27%)も多く、また、「無回答」(29%)も多くなっており、今後の調査方法の検討も必要と思われる。

グラフ Q: 教員・保育士を志望しない理由

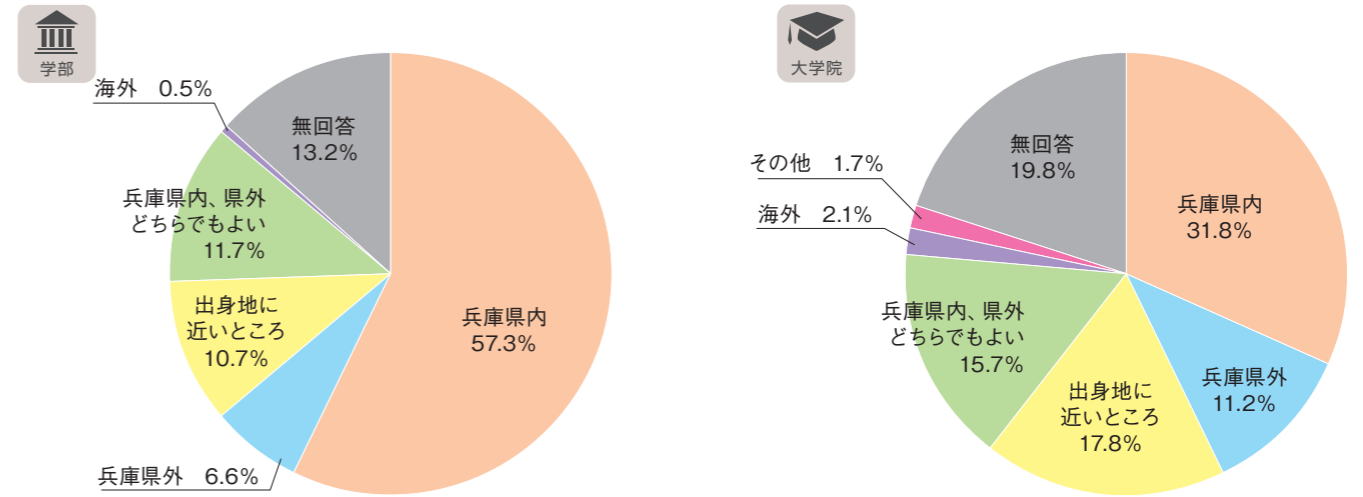


学部生の就職希望地域は、兵庫県内が57%

学部生が就職を希望する地域は、兵庫県内が57%であり、前回(54%)とほぼ同じ割合である。依然兵庫県内の希望が高い傾向にある。大学院生の就職を希望する地域は、兵庫県内が32%(前回35%)と

前回より低くなっている。「兵庫県外」は11%(前回15%)、「出身地に近いところ」は18%(前回15%)、「兵庫県内、県外どちらでもよい」は16%(前回15%)であり、学部生よりも多様化している。

グラフ Q: 就職する地域

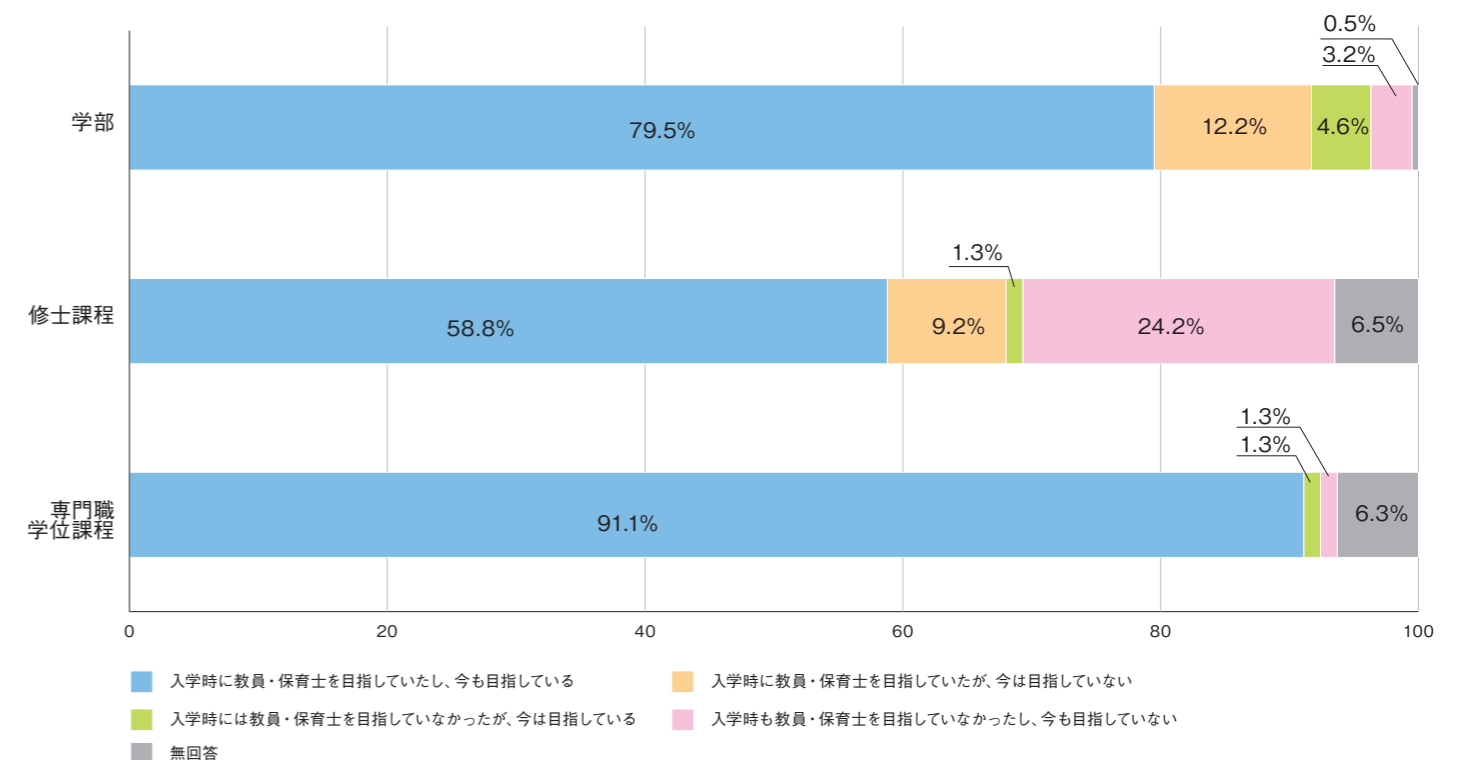


「今も目指している」は、学部生80%、修士課程59%、専門職学位課程91%

教員・保育士志望については、「入学時に教員・保育士を目指していたし、今も目指している」は学部生80%、修士課程59%、専門職学位課程91%であり、修士課程で前回(43%)より増加している。学部生の「入学時に教員・保育士を目指していたが、今は目指していない」

は12%、修士課程の「入学時に教員・保育士を目指していなかったし、今も目指していない」は24%であり、修士課程では前回(33%)より減少しているが、どちらも大きな課題の一つである。

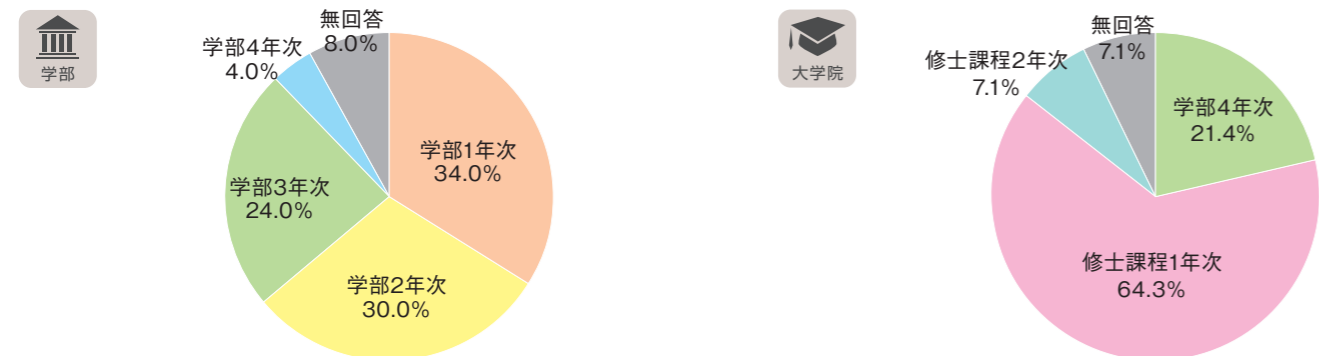
グラフ Q: 教員・保育士志望の入学時からの気持ちの変化



学部生の気持ちが「今は目指していない」と変わった時期は、「学部1年次」34%、「学部2年次」30%、「学部3年次」24%

学部生の気持ちが変わった時期は、「学部1年次」34%、「学部2年次」30%、「学部3年次」24%の順に多く、「学部2年次」が前回(21%)より増加している。

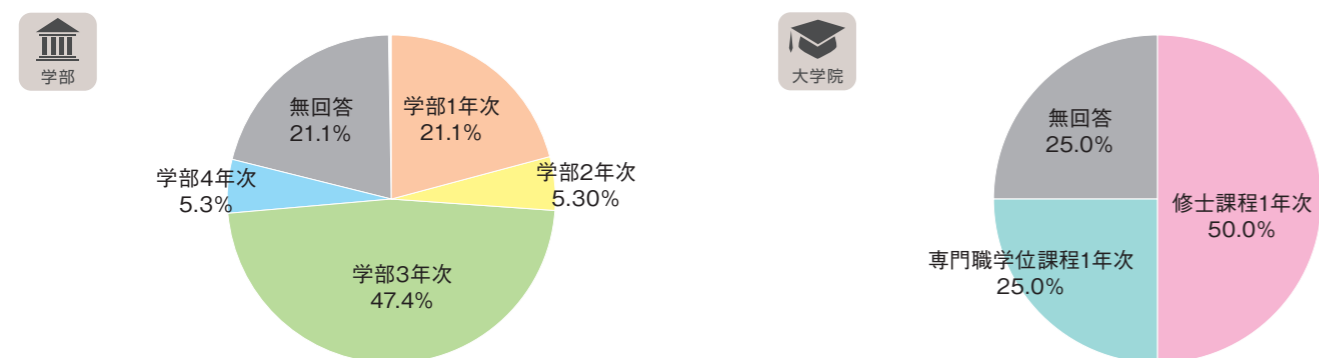
グラフ Q: 気持ちが変わった時期(入学時に目指していたが、今は目指していない)



学部生の気持ちが「今は目指している」と変わった時期は、「学部3年次」47%

学部生の気持ちが変わった時期は、「学部3年次」47%、「学部1年次」21%の順に多かった。3年次の教育実習の経験が大きな影響を及ぼしている。

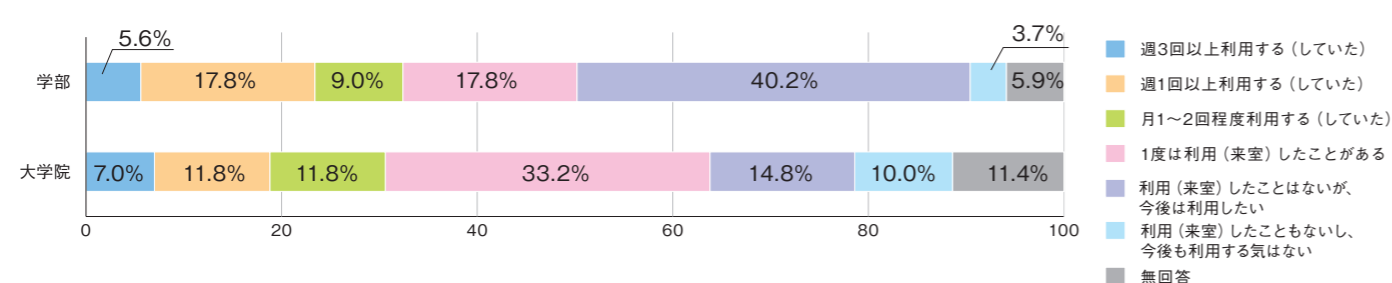
グラフ Q: 気持ちが変わった時期(入学時に目指していなかったが、今は目指している)



キャリアセンターは、学部生の50%、大学院生の64%が利用

教職キャリア開発センターを利用(来室)したことがある学生は、全体では55%(学部生50%、大学院生64%)であった。専門職学位課程は79%と高い利用で、特筆に値する。学部生では、利用(来室)したことがある3年生は93%、4年生は91%と非常に高い。一方、「利用(来室)したことはないが、今後は利用したい」は、1年生(73%)と2年生(67%)では70%前後の割合で高い。1、2年生からの早めの利用(来室)を促していくことも必要である。

グラフ Q: 教職キャリアセンターの利用



学部生の約4割、大学院生の約3割が居住

学生寄宿舎の入居状況を見ると、学部生は38%(1年次44%、2年次37%、3年次37%、4年次29%)、大学院生は34%(修士34%、専門職36%、博士25%)が「入居している」に該当していた。前回調査では学部生44%、大学院生32%(修士26%、専門職40%、博士50%)であったことから、全体的に入居率の低下がみられるが、修士のみ7%の増加がみられた。

学生寄宿舎に入居して満足しているところは、学部生、大学院生ともに「入居費が安い」「構内にあり便利」「個室である」が上位3位にみられた。

学生寄宿舎の入居者が、土足での出入りや迷惑駐車等、入居者規則の違反が生じていることについて、学部生は58%が「現状のままでよい」、27%が「入居者の規則や心得をさらに厳しくして違反者には厳正に対処する」といったように現状維持への志向が多い。大学院生については現状維持と厳正対処といった二方向の考えが36%と同じ割合であり、学部生と比較すると厳正対処への希望が10%ほど多い。

学生寄宿舎の清掃や消防訓練等、嬉野村厚生会の自治活動への参加について、「いつも参加している」のは学部生42%(1年次36%、2年次53%、3年次48%、4年次34%)、大学院生44%(修士49%、専門職33%、博士75%)であり、その内訳をみると2年次の学部生や博士課程の院生の参加率が高い状況にある。

学生寄宿舎の入居者全員が快適に過ごせるようコミュニケーションを深める工夫については、「現状のままでよい」(学部生76%、大学院生

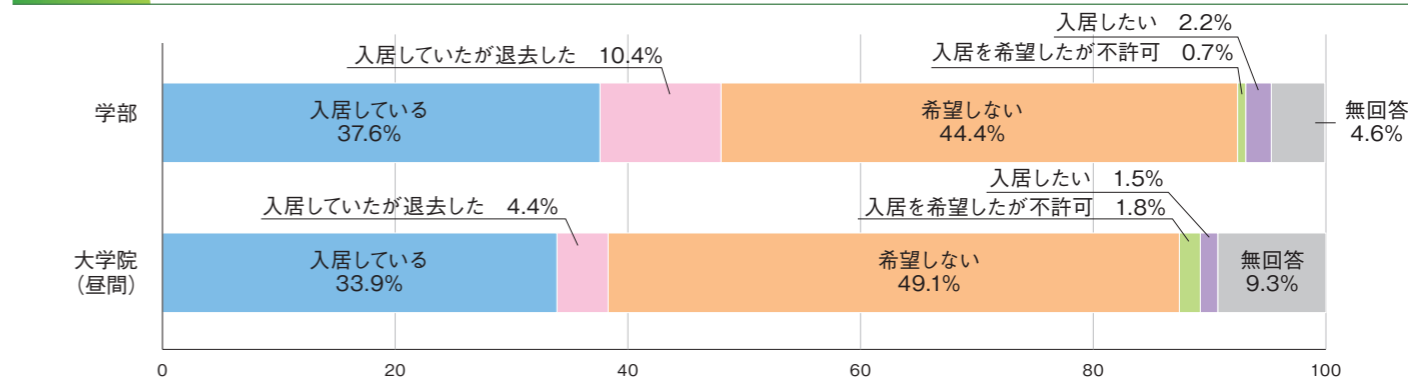
65%)、「集会所を設ける等、施設・設備を改善する」(学部生19%、大学院生20%)といったように学部生と大学院生との意識に大きな差はみられない。しかし「学生寄宿舎のイベントを行う」ことを回答している者は、学部生5.0%(1年次5%、2年次0%、3年次10%、4年次3%)、大学院生13%(修士9%、専門職21%、博士0%)であり、特に3年次の学部生や専門職の院生の割合が高い一方で、2年次の学部生や博士の院生は0%であるなど、その考え方に学年毎の差がみられる。

学生寄宿舎での生活を何をも望むかについて、上位3位にみられるのは「寄宿舎がきれい」「入居費が安い」「部屋内に風呂やトイレがある」である。管理人の有無や、食堂・フリースペースがあることは、前回と同様にあまり重視されていない。

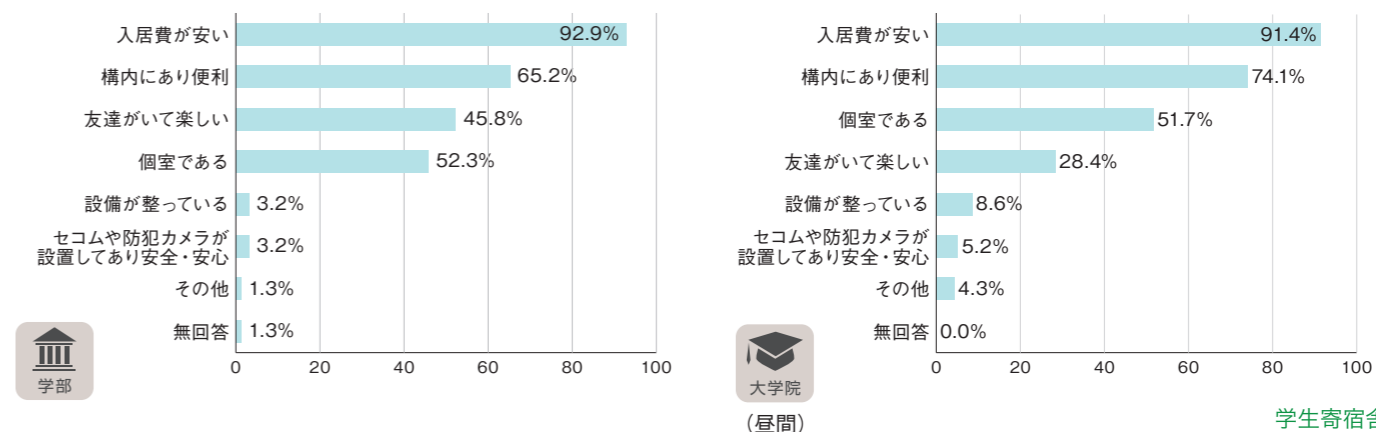
将来、新しい学生寮が建設された場合、入居費はいくらまでであれば入居するかについて、単身寮は15000円以下、世帯寮は25000円以下を望む者が約半数を占めており、これは前回の調査と同様であった。

以上の実態を総合すると、学生寄宿舎については、学部生・大学院生の意識はおおむね類似しているが、Q15やQ16など学年毎に極端な差がみられる回答もあった。その生活意識の差に対応できるようなサポート環境の構築が、よりよい学生寄宿舎の住環境づくりに求められているといえる。

グラフ Q: 学生寄宿舎の入居についてお答えください。

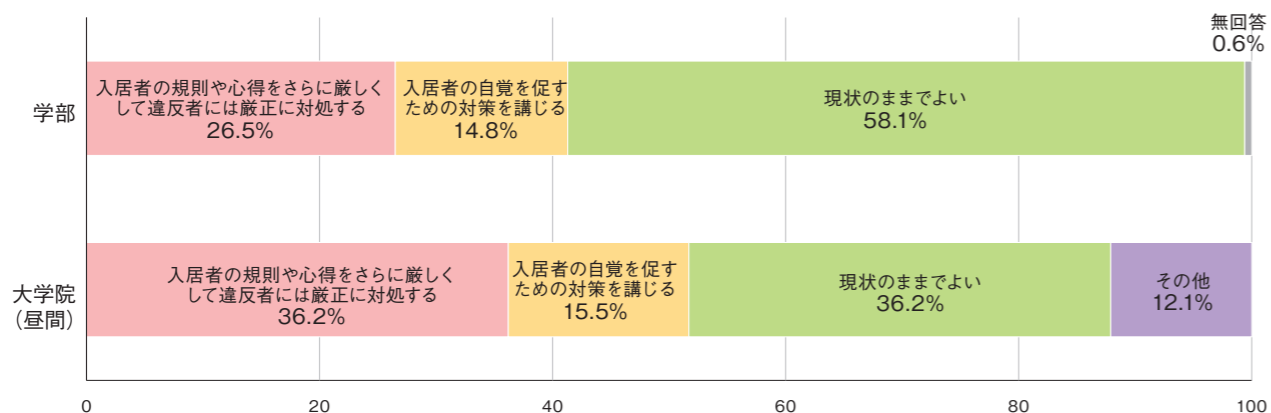


グラフ Q: 入居していて、満足しているところはどこですか。



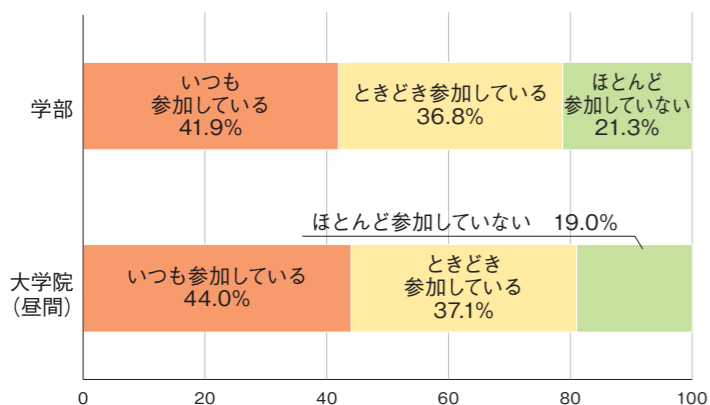
Q:近年、学生寄宿舎において、土足での入出、迷惑駐車等、入居者規則や心得を守らない事例が発生していますが、規則違反問題についてどのように考えますか。

グラフ



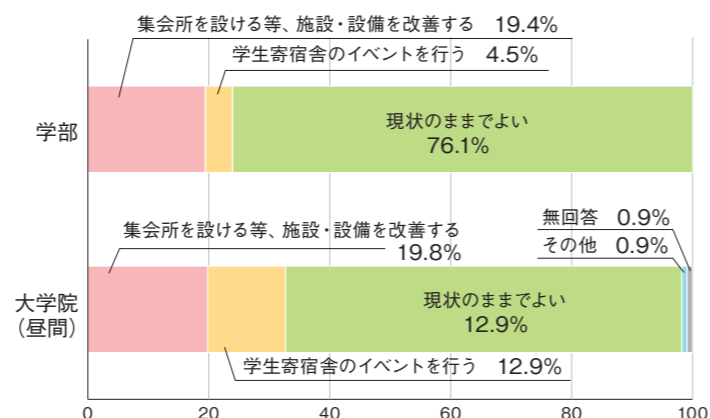
Q:学生寄宿舎の清掃や消防訓練等、嬉野村厚生会の自治活動に参加していますか。

グラフ



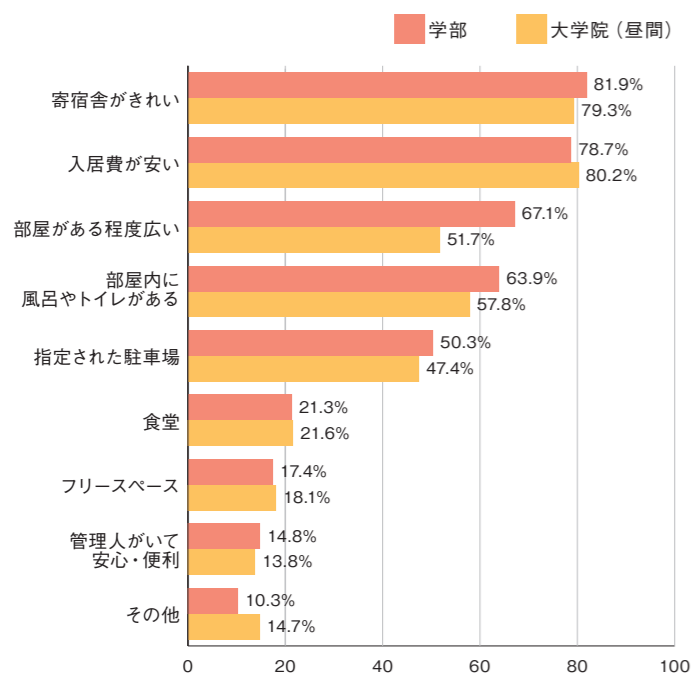
Q:学生寄宿舎の入居者全員が快適に過ごせるよう、入居者同士のコミュニケーションを深めるため、どのようにすればいいと考えますか。

グラフ



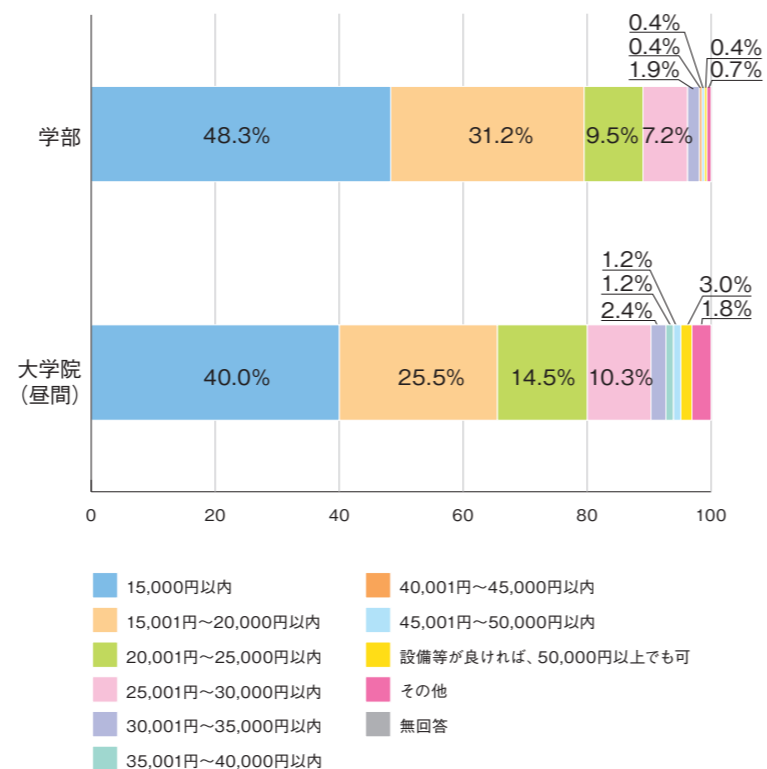
Q:学生寄宿舎での生活に何を望みますか。

グラフ



Q:将来新しい学生寮(单身用)が建設された場合、入居費(光熱水費を含む)は、いくらまでであれば入居しますか。(「独身」「单身」の者のみ)

グラフ



通学手段の半数は自家用車

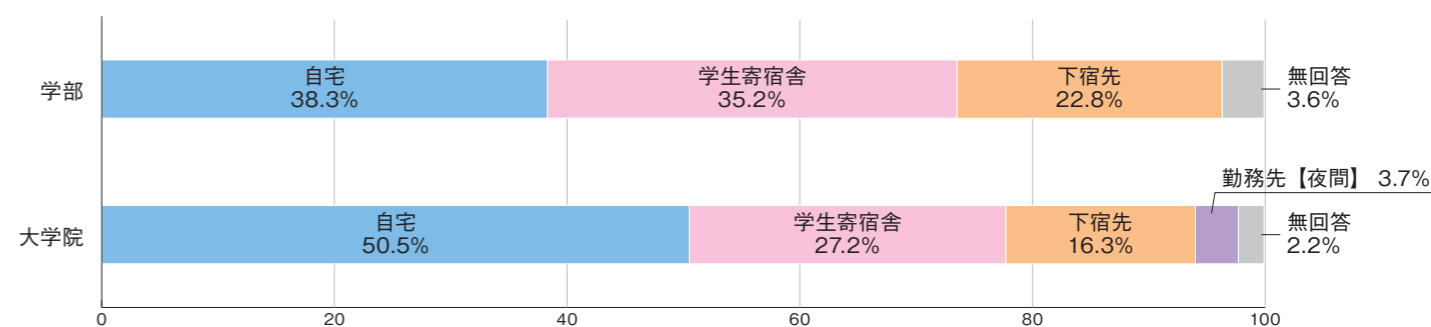
学生がどこから通学しているかについては、「自宅」44%、「学生寄宿舎」31%、「下宿」20%の順に多く、学部生は「自宅」38%、「学生寄宿舎」35%とその差はあまりないが、大学院生は「自宅」51%、「学生寄宿舎」27%と自宅からの通学率が高い。

通学手段については、学部生の50%、大学院生の53%が「自家用車」であり、続いて「徒歩」が学部生35%、大学院生28%であった。また周辺の公共交通機関である路線バス(学部生4%、大学院生2%)

や中国ハイウェイバス(学部生2%、大学院生5%)、JR(学部生7%、大学院生15%)、私鉄(学部生2%、大学院生9%)などの利用や、大学が提供している新三田シャトル便(学部生4%、大学院生5%)や兵教シャトル便(学部生2%、大学院生3%)の利用も僅かながらみられた。

Q:大学へはどこから通学していますか。

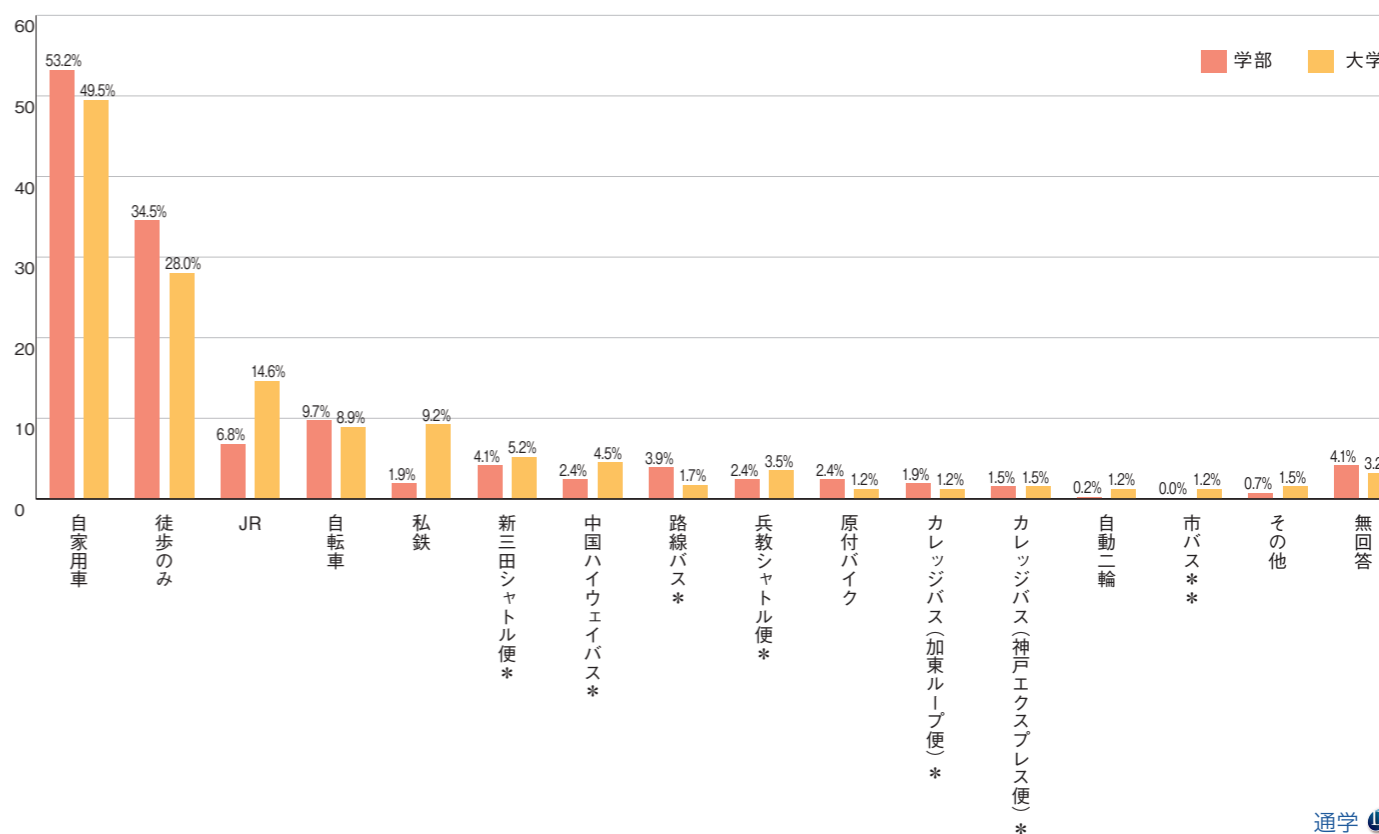
グラフ



Q:通学に何を利用していますか。

グラフ

大学院については、*は(昼間)のみ、**は(夜間)のみ回答。





食生活について、【朝食】を食べる場所は、「自宅」41%、「学生寄宿舍」18%、「下宿先」14%、「大学食堂」3%の順に多い。【朝食】を「あまり食べない」者は7%（学部生7%、大学院生8%）、「ほとんど食べない」者は11%（学部生14%、大学院生8%）と両者合わせると18%であり、これは前回の調査（19%）とほぼ同率である。また「ほぼ食べない」者には、3年次の学部生20.5%や専門職の大学院生11.9%の割合が高い。

【昼食】を食べる場所は、「大学食堂」53%、「学生寄宿舍」13%、「下宿先」5%の順に多く、大学院生はゼミ室・院生室での食事も見られた。【昼食】に使える金額について「451円～500円」20.6%、「メニューや内容等が良ければ550円以上でも可」20.3%、「351円～400円」19.8%の順に多い。【昼食】を「学外の飲食店」で食べる割合は、博士の大学院生13%、4年次の学部生10%、1年次の学部生4%である。

【夕食】を食べる場所は、「自宅」41%、「学生寄宿舍」18%、「下宿先」14%、「大学食堂」4%の順に多い。「学外の飲食店」で食べるという割合は、【夕食】は全体で11%（学部生：1年次17%、2年次19%、3年次12%、4年次17%）（大学院生：修士3%、専門職9%、博士6%）と、【朝食】【昼食】に比べて外食率が高い。

夜間の大学院生については、【夕食】の外食率（男子29%、女子8%）は男子が高く、「持参・購入してきたものをキャンパス内で食べる」中食の割合（男子4%、女子34%）は女子が高いが、半数ほどの院生が「自宅に帰宅してから食べる」内食の傾向（男子58%、女子42%）にある。なお中食の傾向にある者は、専門職の院生は存在せず、修士の院生が占めている。

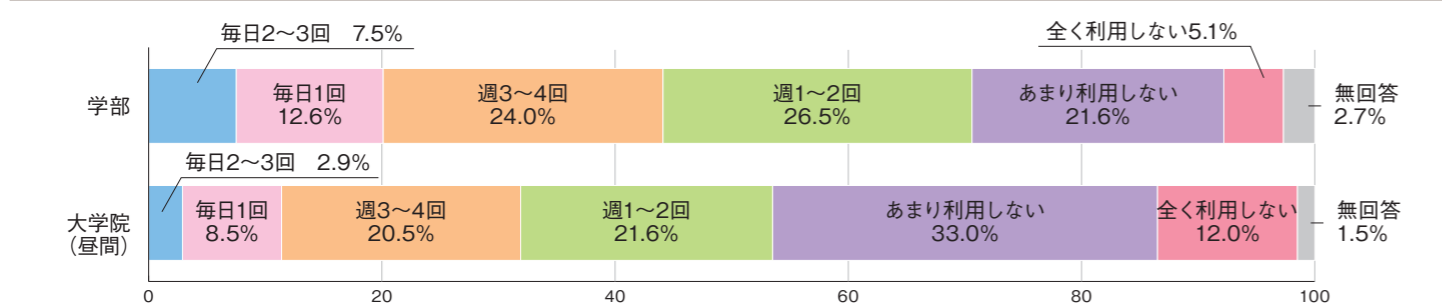
大学食堂の利用について、「あまり利用しない」27%（前回28%）、「全く利用しない」8%（前回11%）といった者は前回の調査よりも若干減少し、「週1～2回」24%（前回19%）、「週3～4回」22%（前回20%）といったように利用者が増えている。毎日利用しているのは1年次の学部生（毎日1回20%、毎日2～3回10%）の割合が最も高い。

主に、昼食時の利用が全体で81%あり、朝食は男子（0.7%）よりも女子（5.1%）の利用率が高く、夕食は学部生（1.6%）よりも大学院生（4.6%）の割合が高い傾向にある。また「朝昼夜の3食すべて」（全体で2%）、または「昼食と夕食」（全体で5%）を学食に頼っている者も僅かではあるが存在することから、栄養面でのサポートや、その自主的管理ができるような栄養の見える化の取組みなどが引き続き望まれる。

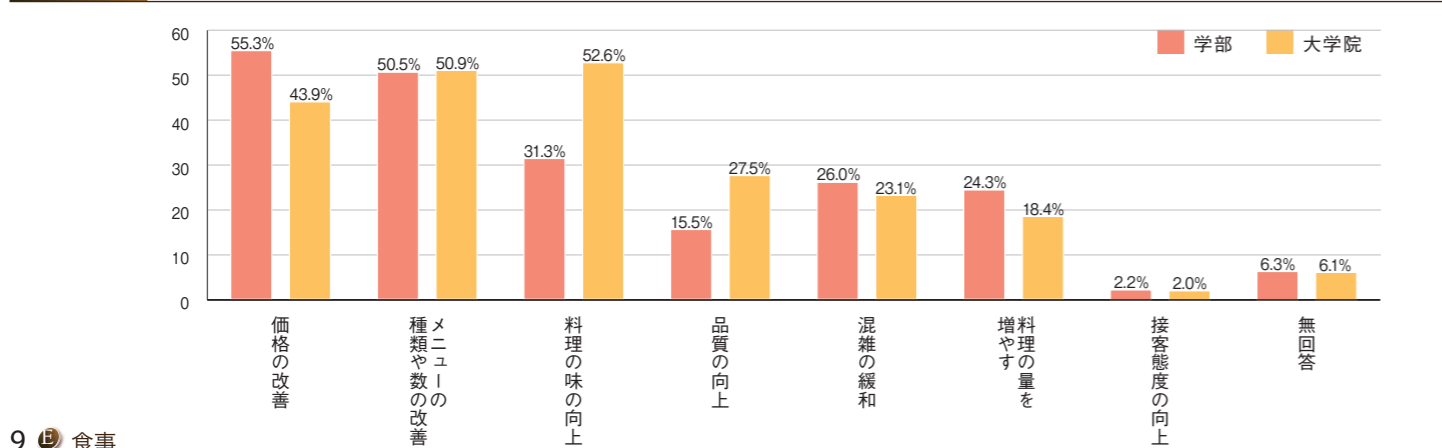
大学食堂に希望することについて、全体的には「メニューの種類や数の改善」50%、「価格の改善」50%、「料理の味の向上」41%が上位3位にみられる。詳細をみていくと、「メニューの種類や数の改善」については男子（44%）よりも女子（56%）の割合が高く、「価格の改善」については大学院生（44%）よりも学部生（55%）の希望が多く、「料理の味の向上」については女子（36%）よりも男子（48%）の方が、また学部生（31%）よりも大学院生（52%）の方が意識が高い傾向がみられた。

夜間の大学院生が神戸ハーバーランドキャンパス内の福利厚生で利用しているものについては、「無料コーヒー」45%、「ミネラルウォーターサーバー」23%がみられた。

グラフ Q：大学食堂をどれくらい利用しますか。



グラフ Q：今後、大学食堂に希望することは何ですか。（3つまで回答可）

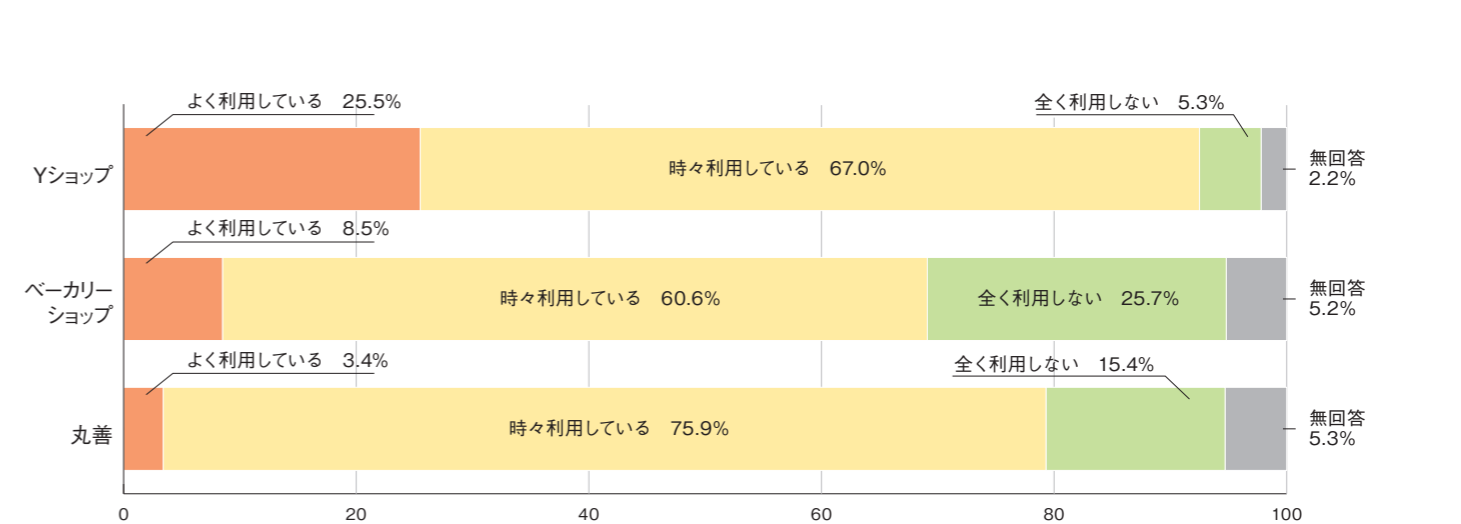


学内の①売店（Yショップ）、②ベーカリーショップ、③書籍売店（丸善）について、「よく利用している」「時々利用している」を合わせた割合（全体）は、それぞれ①93%、②69%、③79%である。前回調査（79%、78%、83%）と比較すると、①売店以外は若干利用率の減少がみられるが、全体的に7～9割ほど利用されている。①売店については、「全く利用しない」と回答した者は5%と、前回の調査（18%）よりも減少している。一方、②ベーカリーショップと③書籍売店（丸善）を「全く利用しない」と回答した者がそれぞれ②26%、③15%おり、前

回の調査（②18%、③12%）よりも利用しない割合が若干高まっている。

①売店（Yショップ）に希望することとしては、「食料品の種類や品数の改善」58%、「営業日・時間の改善」44%、「価格の改善」38%が上位3位にあり、これは前回の調査（それぞれ61%、43%、36%）とほぼ変わっていない。今後これらの意見が反映されていくことが、学生にとってより過ごしやすいキャンパスとなることから、学生の参画も踏まえて学内施設の整備が行われていくことが望まれる。

グラフ Q：現在の日用品売店（Yショップ）、ベーカリーショップ、書店売店（丸善）をどの程度利用していますか。





アルバイトをしている・したことがあるという学生の割合は 2017 年度時のデータと変わらず、約 70% であった。バイトの従事時間は 18 時から 22 時の間に学部生・大学院生ともに集中している傾向であることがわかる(学部生 87%、大学院生 60%)。

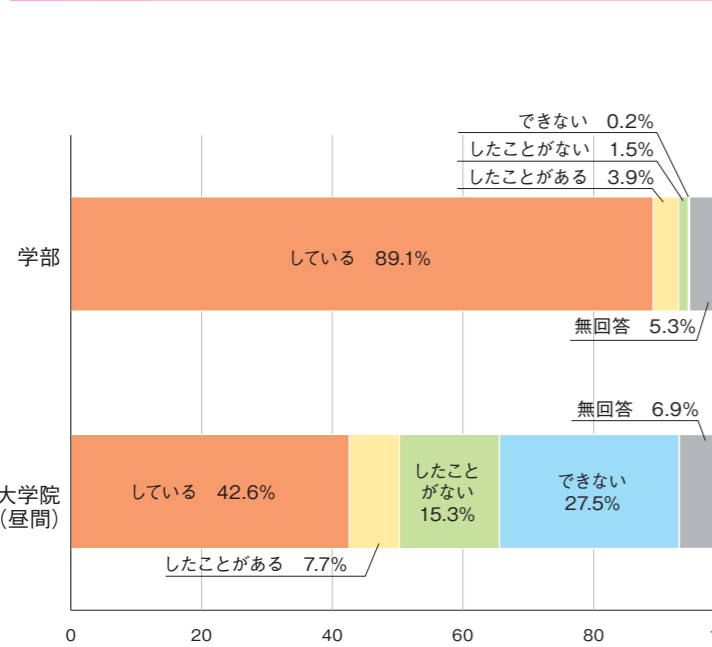
学生の総収入・総支出については 2017 年度調査と比較して、大きな変化はなかった。一方、アルバイト収入の主な使途は生活費が減り(2017 年時 71%、2019 年時 68%)、娯楽費(2017 年時 79%、2019 年時 82%)や課外活動費が若干増えている傾向にあった。

また、アルバイトでのトラブルについては、2017 年時(6%)にも確認されていたが、2019 年時にはさらに増加している傾向(8.5%)に

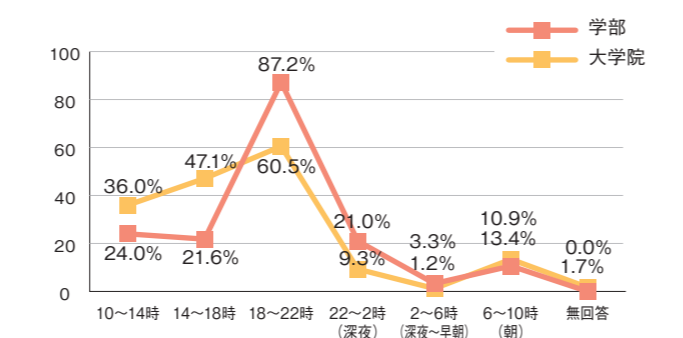
なっている。特に 3 回生・4 回生がトラブルがあったと回答した割合は 12% となっており、他の学年、大学院、専門職大学院の割合(10% 未満)と比較しても多い割合になっている。

学生の経済状況は 2 年前と比較しても大きく変化なく、生活上やむを得ずアルバイト等の収入に頼らないといけない学生は一定数いる結果となっている。そういった状況の中で、アルバイトを行う期間が長くなるほど、アルバイト先でのトラブルが起こりやすくなっていることが考えられる。労働基準監督署といった外部機関の相談先の周知や学内で相談を受ける体制づくりを推進していくことが望まれる。

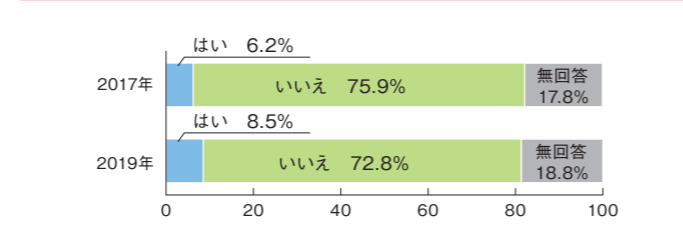
グラフ Q: 本学に入学後アルバイトをしていますか、または、したことがありますか。



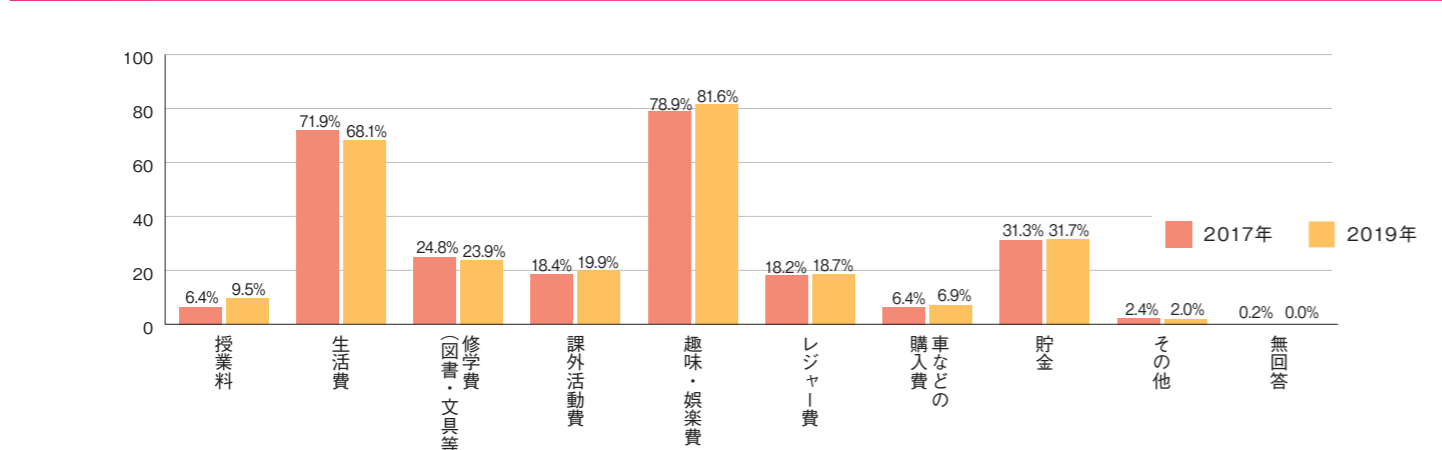
グラフ Q: 主な従事時間は何時頃ですか。



グラフ Q: アルバイトでトラブルになったことがありますか。



グラフ Q: アルバイト収入の主な使途は何ですか。



附属図書館の取り巻く状況について、前回調査した 2 年前と比べて学部の改組と大学院の一部の改組があり、図書館を利用する学部生と大学院の学生の意識の変化がみられる可能性がある。また土日の開館も行われている。そのことを念頭において今回の調査について解析してみよう。

附属図書館をどの程度利用しているかについて、学部生(412 名)に関しては「ほとんど毎日利用している」が前回 4% から今回で 8%、「週に数回利用している」が前回 30% から今回 45% へと割合が増加している。土日の開館が行われており、自由記述の欄で PC の利用や学内無線 LAN の利用に関することが挙げられており図書館の利用価値が学部生に認知されているものと考えられる。一方大学院生に関しては、修士課程は前回調査が「ほとんど毎日利用している」が 12%、「週に数回利用している」33% であった。今回調査対象の大学院生は、修士課程(208 名)と専門職学位課程(118 名)の合計のアンケート結果を示すが、前回の結果とほぼ同様の割合となっている。PC 等の利用が図書館でなく、学内の研究室等で行われていることを示している。

に移行したためであると考えられる。

これに関連して、夜間の大学院では、よく図書館で利用される資料について 1. 専門書が 66% と突出している。しかし、夜間の課程では、資料(図書・雑誌)の充実させてほしい要望やキャンパス内の図書資料の取り寄せを充実してほしいという要望が強い。図書の取り寄せサービスに関しては、前回の調査で「利用する」「時々利用する」と答えた割合が合計 30% 弱であったが、今回の調査では 40% 程度と向上した。専門書は現職の学校教員等が、自分の実践をアカデミックにとらえなおすためには不可欠であり、ハーバーランドキャンパス内に開架スペースの追加確保と共に研究の環境整備が急がれるところである。

附属図書館で満足しているものについては、学部、大学院とも、情報環境(パソコン、プリンタ、無線 LAN)が整備されている、開館時間が長い、学習研究に必要な本、雑誌がそろっているということを挙げる割合が多かった。この 3 つの他に満足しているものとして、様々な学習のための空間が用意されている点を挙げる学生も多く、これらのスペースの認知度と利用しやすさが調査結果に反映されているものと考えられる。

図書館の利用目的について、割合の多いものから順に並べると、学部では PC の利用、コピー印刷、一人で自習、図書館の資料の順になっている。大学院生に関しては図書館資料の利用が修士課程では 77%、専門職学位課程が 73%、博士課程も 75% と圧倒的に多い。次に、一人で自習、調べ物の順番で上位を占めている。図書館の利便性向上のためには、学部生が PC やコピー機の拡充、大学院生に関しては図書館の資料の充実が効果的であると考えられる。

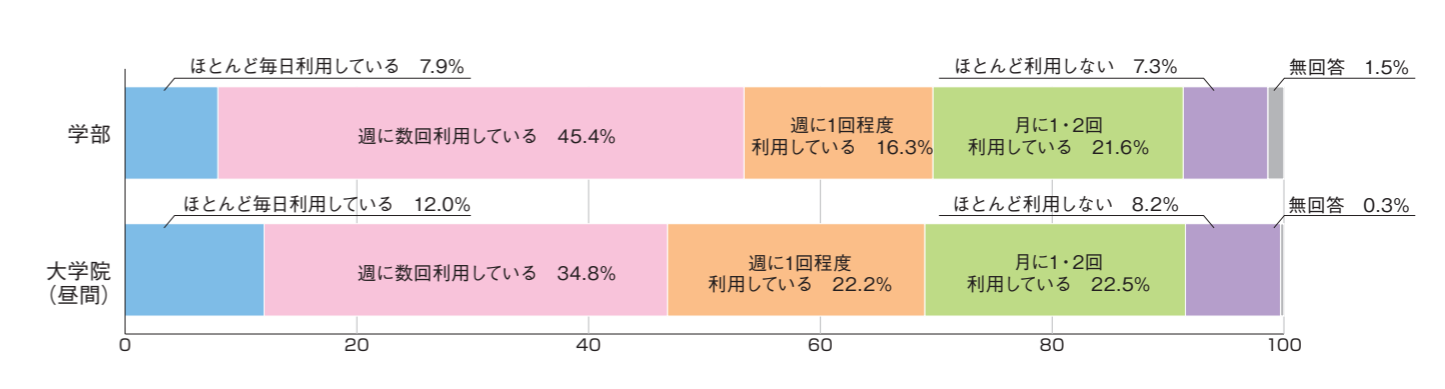
図書館の利用スペースについては、2 階の閲覧室や PAO(オープンテラスを含む)が多く利用されている。学部生は PAO、大学院生は 2 階の閲覧室に向かう傾向がある。

一方、教材文化資料館であるが、前回調査と比べ「見たことがない」「あることを知らない」割合が学部(30%・9%→34%・12%)、大学院の修士課程(28%・7%→27%・9%)、専門職学位課程(24%・7%→32%・9%)と否定的意見が増加した。これに「見たことがある」の割合を加えると依然として学部・大学院で 6 割~7 割程度はほとんど活用していない実態がわかった。教材文化資料館の意義も踏まえて展示する題材や展示物の工夫、展示期間等、今後の運営の仕方が模索されるべきであろう。

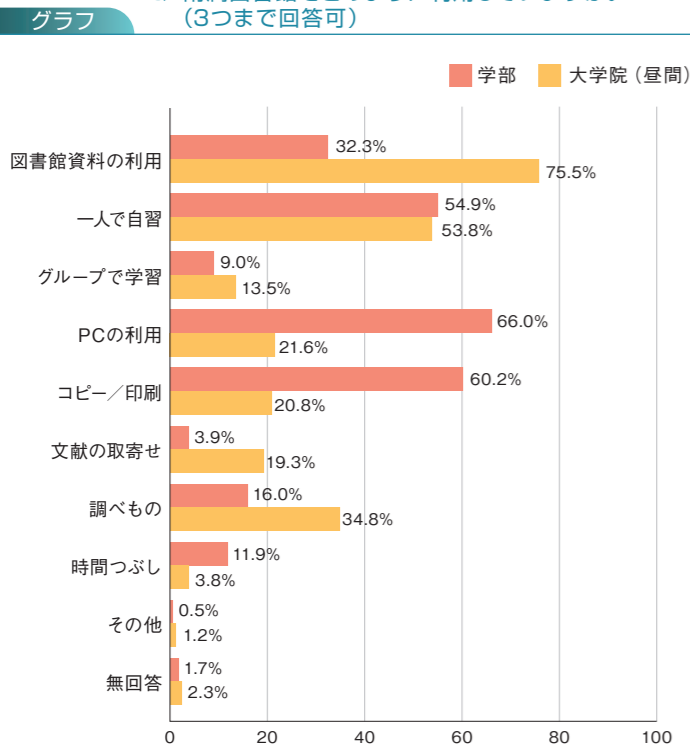
よく図書館で利用される資料については、学部が 1. 一般書、2. 教科書・指導書、3. 一般書の順であるのに対して、修士課程は 1. 専門書、2. 一般書、3. 雑誌、そして専門職学位課程は、1. 専門書、2. 教科書・指導書、3. 一般書であり、2 つの大学院の課程で利用される資料の間に差が認められた。ちなみに前回調査結果は、大学院では 1. 専門書、2. 一般書、3. 学位論文の順であった。専門職学位課程の 2 位の教科書・指導書であることは、2 年前と比べて大学院の一部の教科が専門職学位課程

最後に図書室に今後拡充を望むものとして、調査結果での図書館の利用方法や好評な点を生かし図書館の満足度の向上を行うべきである。具体的には情報環境 PC などの機器の拡充、専門書や教科書等の新規購入、そして土日の利用や開館時間の延長の維持を行い、利便性を向上する取り組みが挙げられる。そして、満足度が低い点についての改善、館内ツアーや文献探索のための説明会を積極的に行い、特に夜間の学生のために相談できる窓口をつくるべきである。また、今後の時代を見据えた ICT の情報機器を生かすための電子書籍やデータベースの充実を行うべきである。

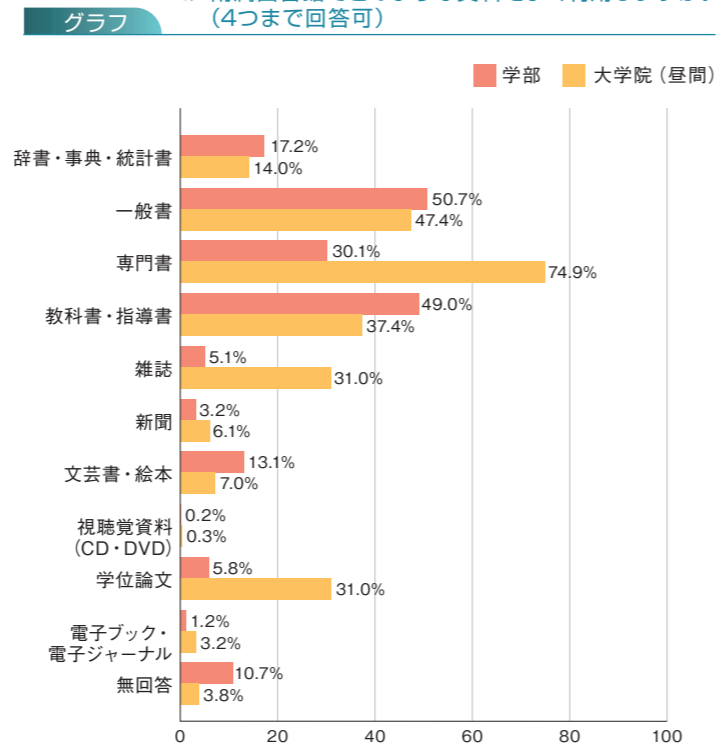
グラフ Q: 附属図書館をどの程度利用していますか。



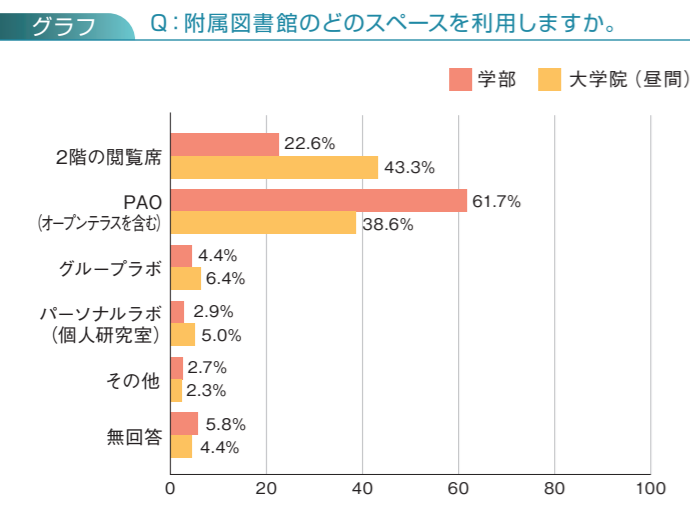
Q: 附属図書館をどのように利用していますか。(3つまで回答可)



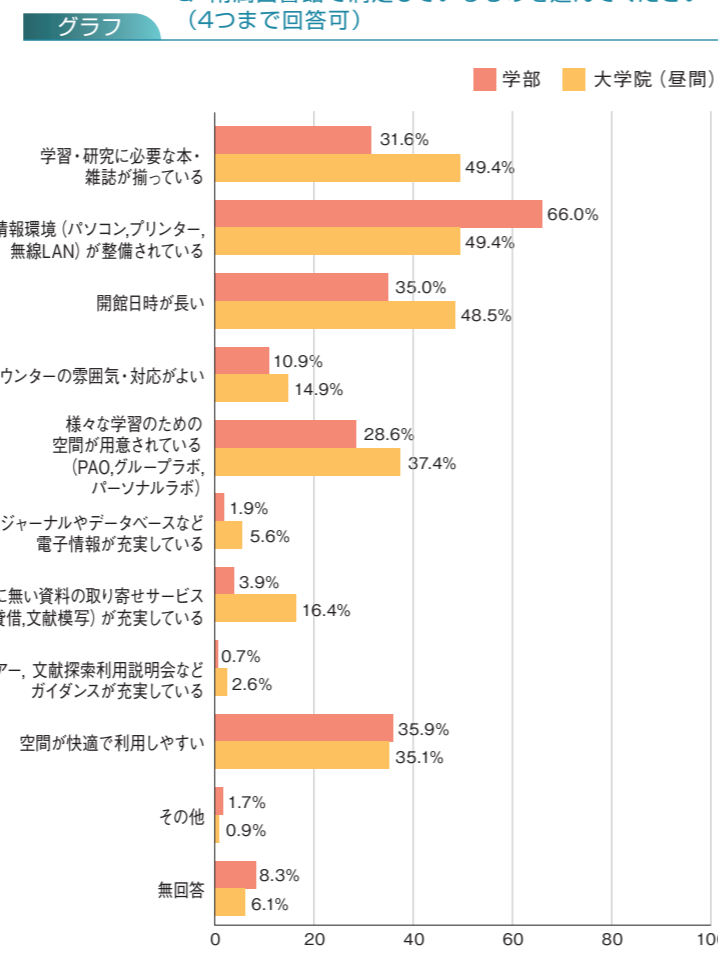
Q: 附属図書館でどのような資料をよく利用しますか。(4つまで回答可)



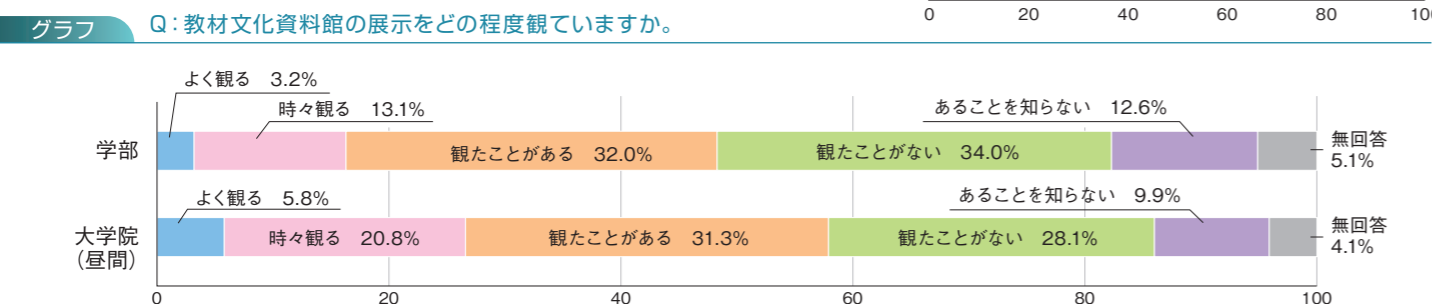
Q: 附属図書館のどのスペースを利用しますか。



Q: 附属図書館で満足しているものを選んでください。(4つまで回答可)



Q: 教材文化資料館の展示をどの程度観ていますか。

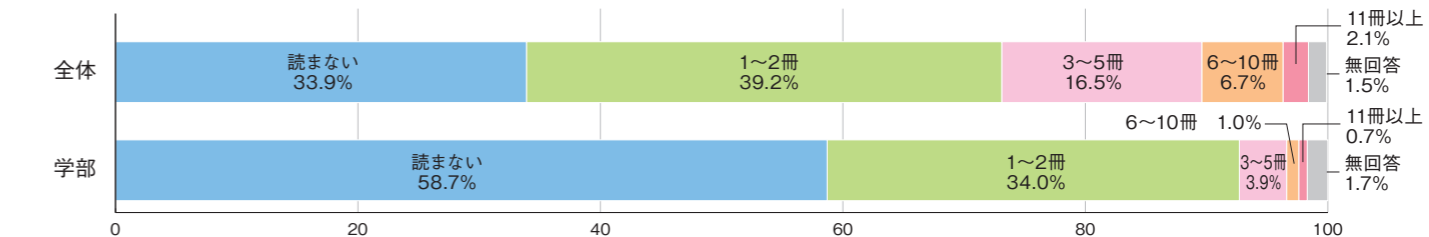


学生は「SNS中心」の生活

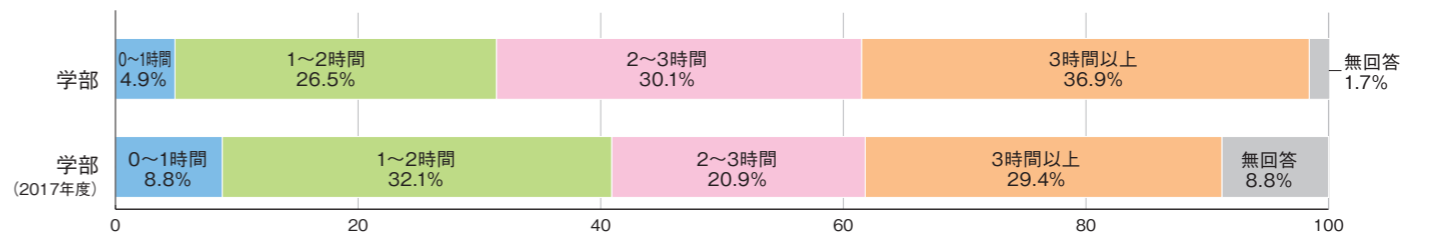
学生はどのような生活を送っているのかについて様々な角度から質問をした結果、昨今の社会情勢を反映した予想通りのデータが示された。前回調査でも指摘されたように、活字離れはさらに進行している(学部生・大学院生全体では33.9%が「全く本を読まない」、32.0%が「1~2冊」)。特に学部生ではその傾向が顕著に示され、「全く本を読まない」が58.7%(前回は48.5%)、「1~2冊」が34.0%

と、9割強の学生が書籍から縁遠い生活を送っている。それに反して、「スマホまたはネット視聴時間」が前回調査に比べて大幅にアップしている(「2~3時間」が20.9%→30.1%、「3時間以上」は36.9%)。一方で、「TVの視聴時間」も減っていることからして、「読書習慣がなくなっていると同時に、様々なやりとりを学生はスマホとネットを使用したSNSで行っている」ことが明らかとなった。

Q: 1ヶ月平均して、何冊の本を読みますか。(雑誌は除く)



Q: 1日のスマートフォンまたはインターネット視聴時間は何時間ですか。

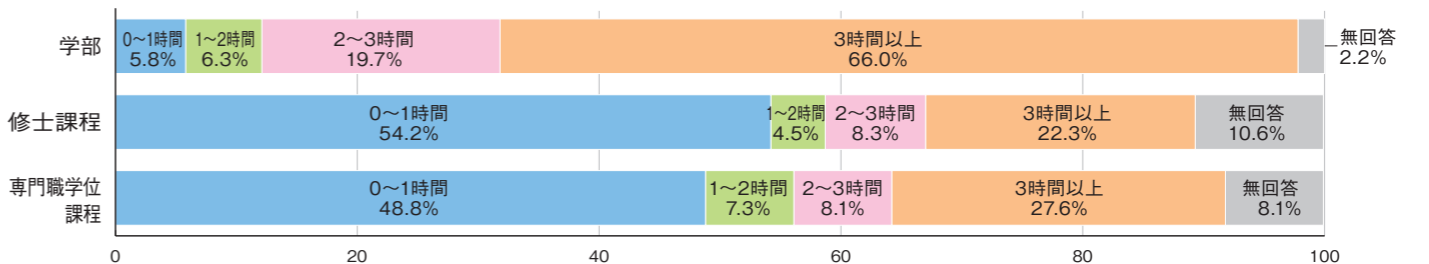


学生生活における「アルバイト」の比重アップ!

伝統的に兵庫教育大学の学生生活は「授業・クラブ・バイト」が三種の神器と称されるが、従来の「クラブ活動」以上に「アルバイト」に費やす時間が学部、大学院ともに増加している。特に3時間以上の割合が学部で66.0%、大学院生(修士課程/専門職学位課程)においても

22.3%、27.6%と、前回調査からそれぞれ5ポイント以上のアップとなっている(専門職にいたっては17ポイントアップ)。生活費のためか、それともその他の理由かは定かでないが、学生はアルバイトに一層力を入れている状況が浮き彫りとなった。

Q: 1日のアルバイト時間は何時間ですか。



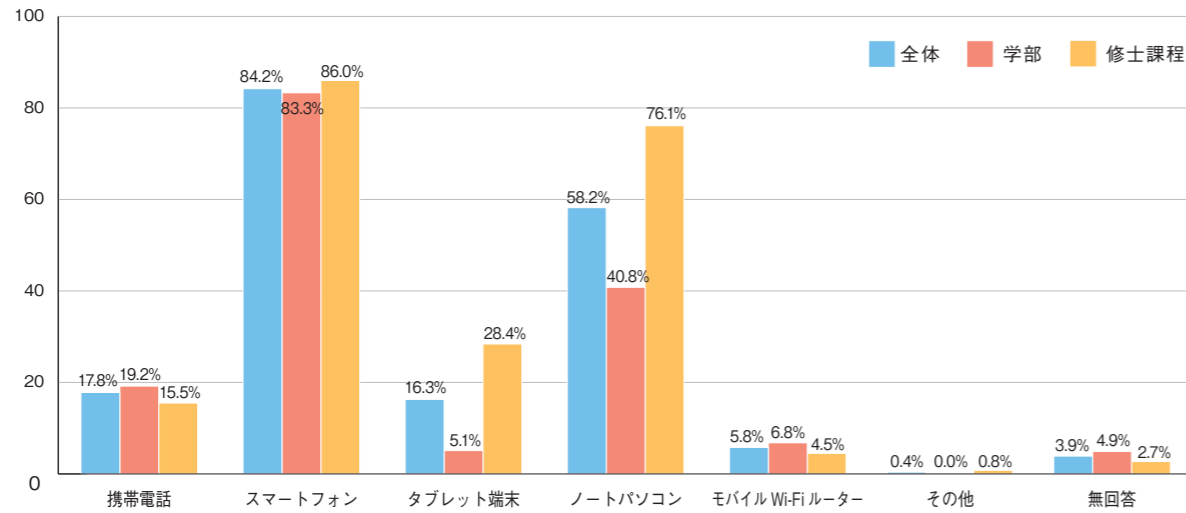


学生にとって不可欠な「Wi-Fi環境」

学内での空き時間を過ごす場所、あるいは自主学習を行う場としては、全体的に「附属図書館」の割合が高くなっている。特に、学部生については約10ポイント上昇しているとともに、「学生ホール」の利用も高くなっている。従来から高い「食堂」とともに、学生にとってはWi-Fi環境があることが大きな条件になっているとも言えよう。また、「自学自習する場の確保」については、大学がここ数年Wi-Fi環境の整備に力を

入れていることが評価されて、ほとんどの学生が満足していると言える。それに関連して、「所有している通信端末」については全体として「タブレット端末」(16.3%)、「ノートパソコン」(58.2%)と、いずれも前回調査から約5ポイントずつアップしている。特に、以下の図に示したように、大学院生の所有率の伸びが著しい。

グラフ Q: 大学内で、電話、メール、ネット閲覧等を行うために、どのような通信端末を所持していますか。(複数回答可)

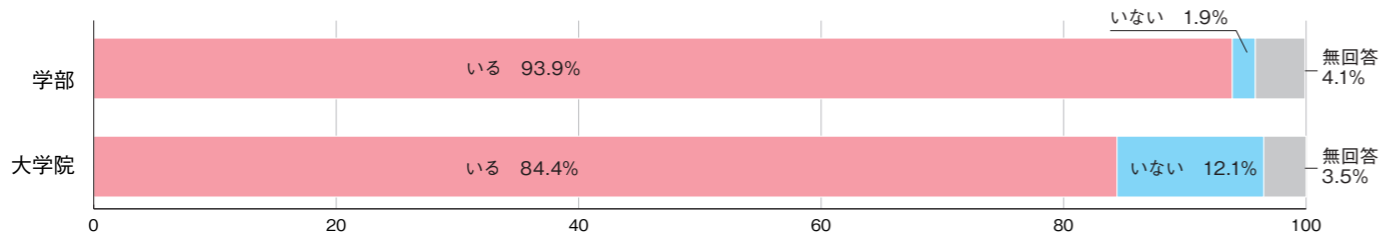


友人関係は概ね良好

「現在、学内に親しい友人がいますか」という質問には、約90%(学部93%、大学院85/90%)が「いる」と回答しており、人間関係は学生生活において重要であると言われているが、概ね良好であると言え

よう。ただ、修士課程の大学院生においては13%の学生がいないという結果であり、少し気になる結果でもある。

グラフ Q: 現在、学内に親しい友だちがいますか。



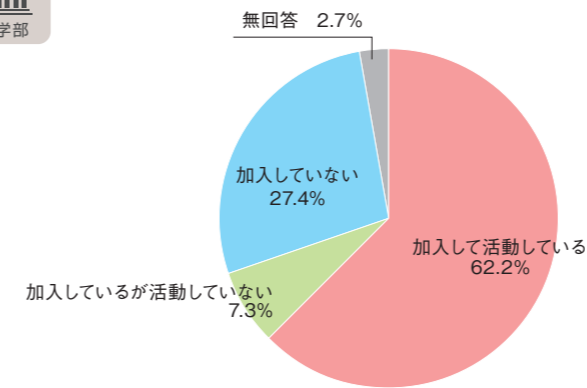
少しずつ変化する「クラブ活動」

「課外活動団体への加入」については、2年前の調査では前々回の4年前(70%)に比べて極端に低い57.1%というデータが得られたが、今回は62.6%と若干高い値を示した。なお、その割合は「体育系」が69.0%と8ポイントアップした分、「文化・芸術系」並びに「両方へ加入」の割合がそれぞれ減少している。個人的印象ではあるが、文化・芸術系の活動種目が限定されるようになったことが原因かもしれない。なお、大学院生の加入率が5ポイントアップしていることは興味深い。多くの学生競技連盟が大学院生の出場を認めていることも影響しているのか、大学院でも継続して活動を希望する学生が多いのかもしれ

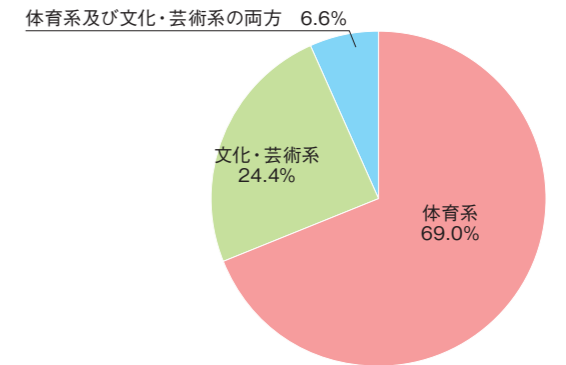
ない。

一方で、活動日数や時間については前回と比べて大きな変化はない。加入した動機についても大きな変化はなく、「友人がほしい」「趣味と一致する」「高校時代からの継続」「技能の向上」が3~4割を占めている。一方で、「活動していない。または加入していない」理由については、下図に示したように、「アルバイトが忙しい(24.5%)」「拘束されたくない(22.4%)」に加えて、「通学に時間がかかる(23.1%)」が5ポイントアップしており、通学生の増加は本学のクラブ活動に少なからず影響を及ぼしている。

グラフ Q: 課外活動団体に加入していますか。

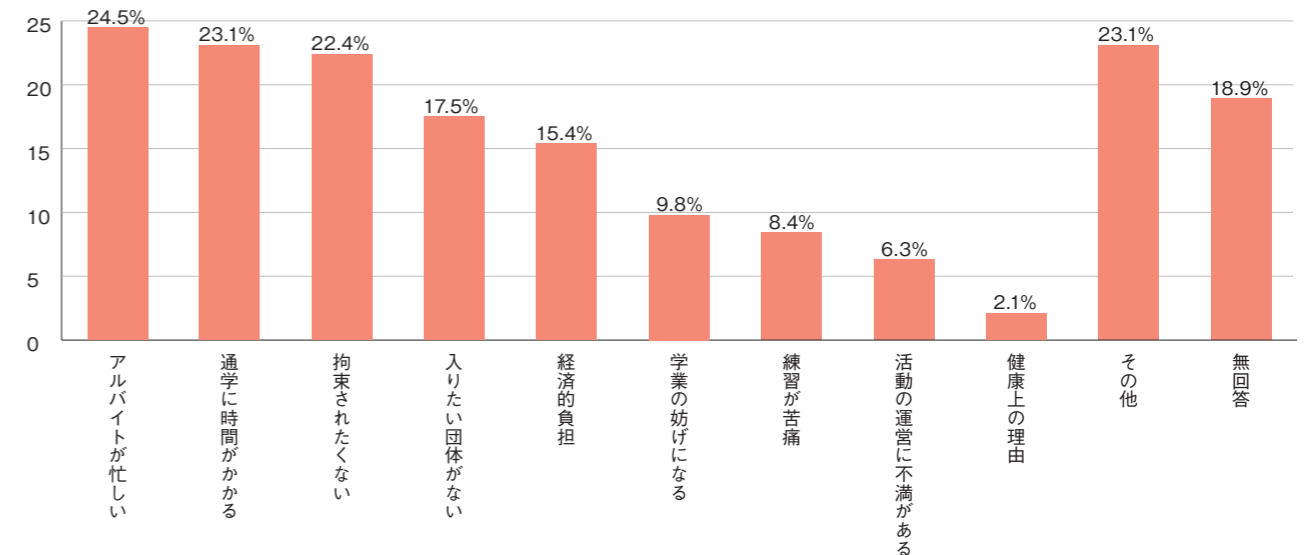


グラフ Q: どのような課外活動団体に加入していますか。



Q: 課外活動していない、または加入していない主な理由は何ですか。

グラフ 「加入しているが活動していない」「加入していない」と回答した者のみに限定。5つまで回答可



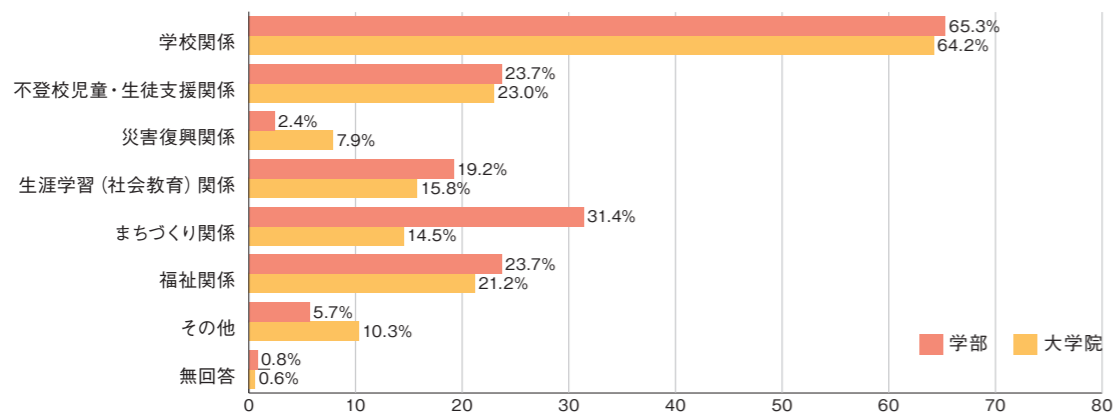


ボランティアは、「スクールサポーター」が中心

「ボランティア活動への参加の有無」については約半数と大きな変化はない。ただ、その中身は学部生、大学院生ともに「学校関係」、つまり「スクールサポーター」の割合がかなり高い(全体で64.9%)。「ボランティア活動に参加したことがない理由」としては、全体的に「関心がない」という割合は減っており、ボランティアに対する関心・意識は一般的になりつつあると思われる。特に学部生においては、「関心がない

から参加しない」割合は25.0%と、前回の41.4%からかなり減少している。ただ、実際にそれが活動に結びついているかは微妙であり、学生たちは関心がありつつも、何らかの理由をつけて(クラブやバイトで忙しい)活動していない」というのが現状と言える。

グラフ Q: ボランティア活動の内容はどのようなものですか。

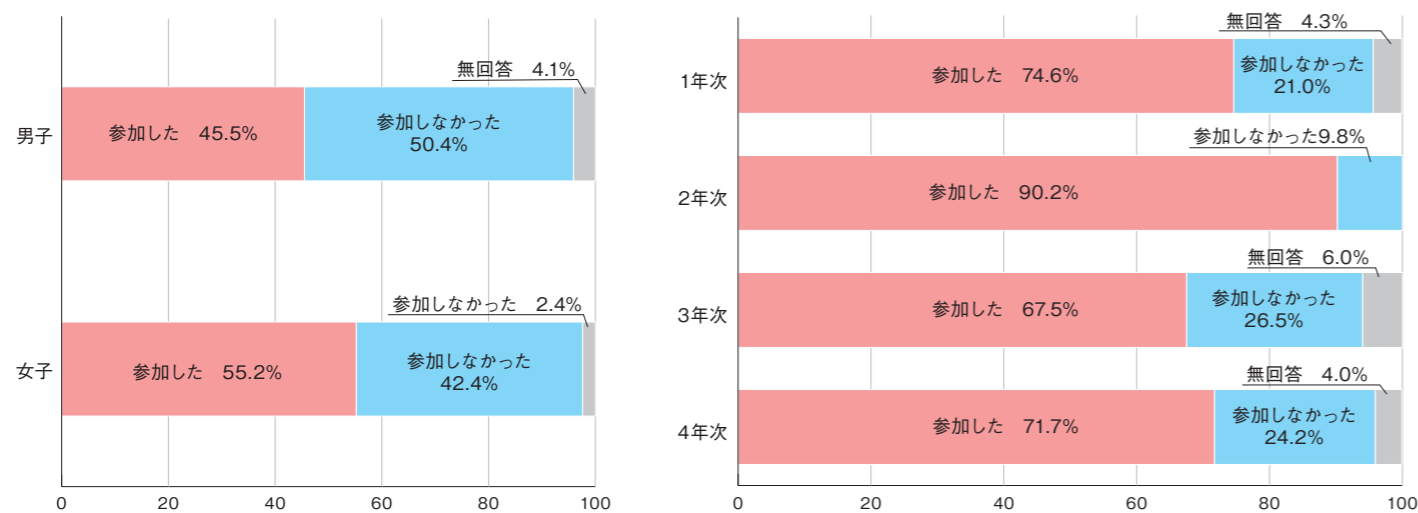


大学祭(嬉望祭)について、学生も大学も再考する時期!?

「大学祭への参加」については学部生に特化してみると、参加率は約75.0%と約10ポイント下がった前回から変化はほとんどない。また、学年でみると運営・実行委員の中心学年である2年生では高い(男子80.6%、女子95.1%)ものの、他学年では7割弱に止まっている。その理由についても相変わらず、「魅力を感じない・面白くない」が半数弱を占めている。前回報告書でも指摘したが、半数近くが

否定的なイベントを大学全体として支援する必要があるのか、あるいは学生主体の企画に教育的意味を持たせるのであれば教職員がもう少し積極的に関わる必要があると感じる。来年で40回を数える嬉望祭であるが(今年度はコロナ禍で11月実施は中止となったために来年在39回となるかも)、開催日数含めて、根本的に見直す時期に来ているのではないだろうか。

グラフ Q: 昨年行われた大学祭(嬉望祭)に参加しましたか。



国際交流への関心が徐々に高まりを見せている

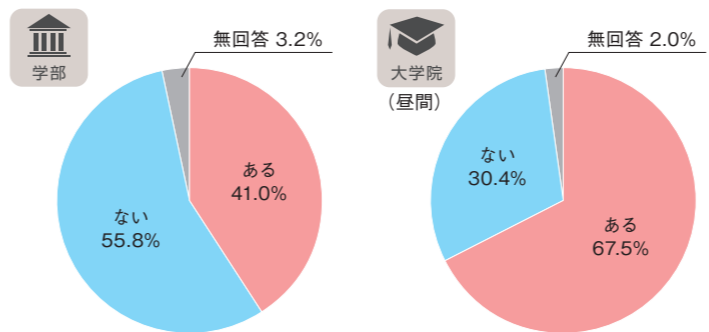
海外への渡航経験は最近の調査ごとに少しずつ増えてきている(今回53.1%、前回48.4%)。特に大学院生に渡航経験を有する者が多く、専門職学位課程の女子学生では85.0%にのぼる。渡航回数について見ても1回のみと回答した学生の割合が前回よりも減少し(今回25.8%、前回33.2%)、複数回行ったことがあるという者が増えている(今回61.0%、前回53.5%)。この傾向は学部生に顕著に見られる。渡航の目的は、学部生及び大学院生共に観光と回答した者が多く、全体の8割を占める。これ以外の目的としては、語学研修、留学、学会などが続く。

本学の留学生との交流については、あると回答した学生が39.5%で前回の34.5%より増えている。交流はないが興味・関心はある(今回16.2%、前回14.3%)を加えると半数以上の学生が交流することに前向きである。本学が行っている派遣留学生や海外短期研修の支援については、半数以上の学生が知っている(今回57.8%、前回56.1%)と回答しているが、どちらにも支援があることを知らない学生が3割近くいる(今回28.0%、前回29.7%)。この傾向は学部生において今回改善が見られるものの(今回24.8%、前回29.2%)、大学院生については変化が見られない。

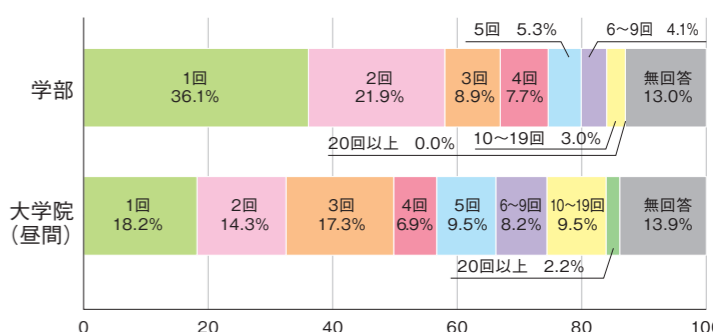
派遣留学、海外短期研修に行ってみようかについては、行ってみようかと回答した割合が増えている(今回34.4%、前回31.3%)。この傾向は、特に専門職学位課程の院生において顕著で、その中でも女子学生が強い希望を持っている(今回47.5%)。行ってみよう国については、半数近くの者が米国(49.6%)と回答し、以下、イギリス、オーストラリア、ドイツ、カナダ、スイスと続いている。上位3番目までは学部生及び大学院生ともに人気の高い国となっている。なお、アンケートの選択肢にはないが、自由記述の欄でフィンランドと回答した者があった(今回6.6%)。

今回のアンケート結果から国際交流への関心は徐々に高まりつつあることがデータから裏付けられる。海外への渡航回数と派遣留学、海外短期研修の希望などの関連から海外での経験が留学への意識につながっていることが考えられる。ただ、本学の支援制度の周知が学部生においては改善傾向にあるものの、それでも3割近くの学生が知らない現状がある。国際交流の意識を高める機会としては、身近な本学の留学生との交流が挙げられる。幸い本学の学生は留学生との交流に対して前向きな姿勢が窺える。そこで、さらに留学生との交流を活発化するとともに、本学の支援体制の周知を図っていくことが大切である。

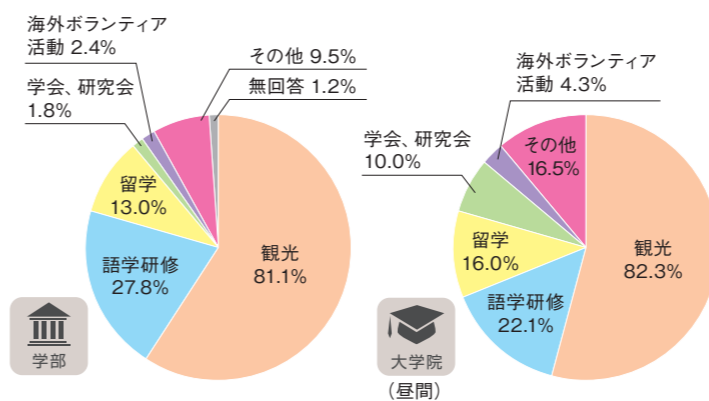
グラフ Q: 海外渡航をしたことがありますか。



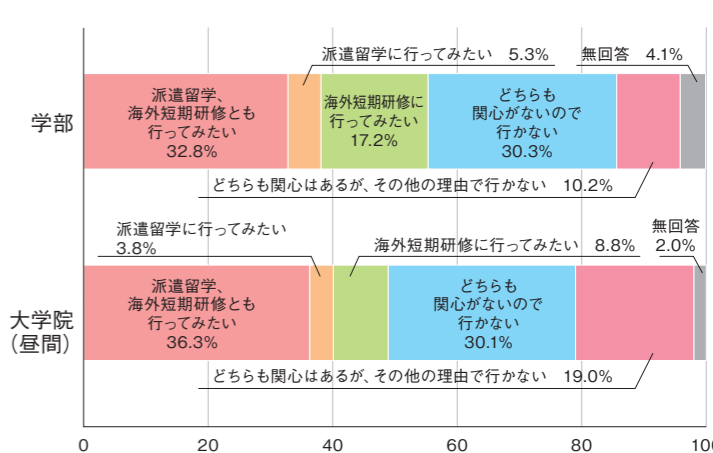
グラフ Q: 海外渡航の回数(海外渡航をしたことがあると回答した者のみ)



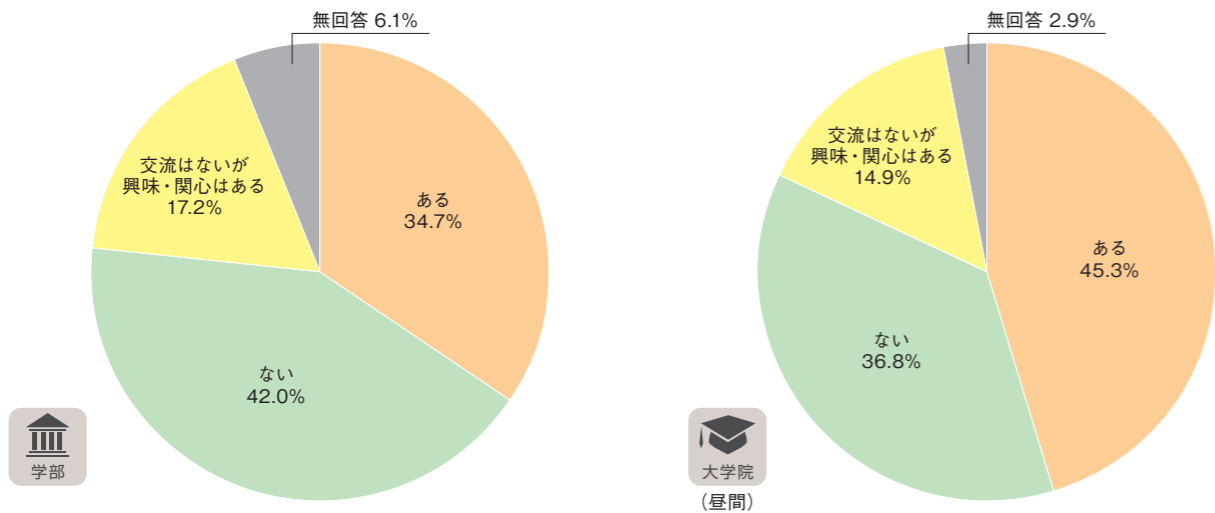
グラフ Q: 海外渡航の目的は何ですか。(複数回答可/海外渡航をしたことがあると回答した者のみ)



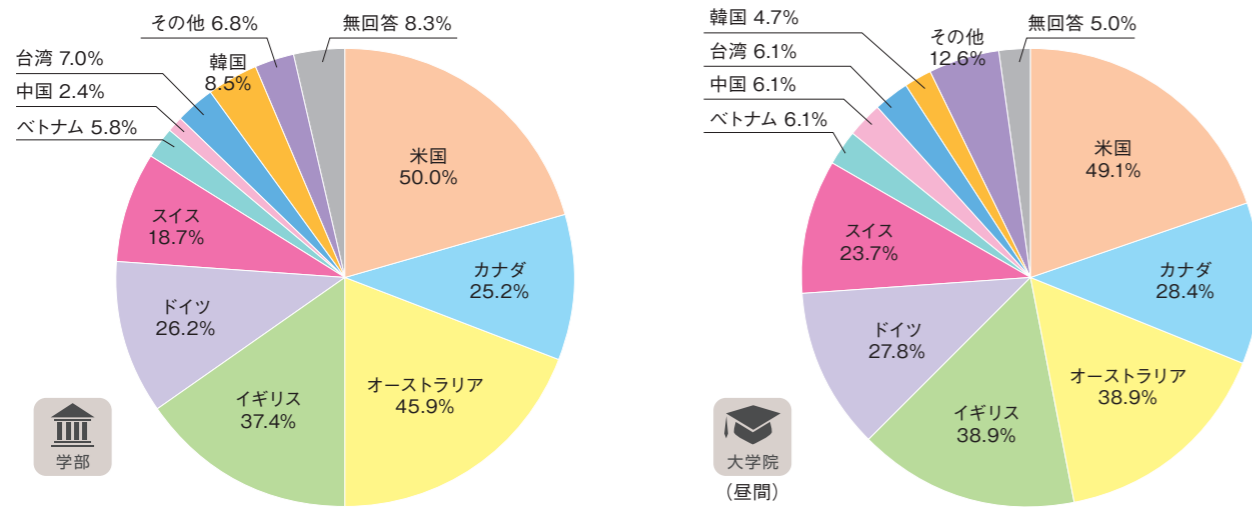
グラフ Q: 派遣留学、海外短期(語学・異文化体験)研修に行ってみようか。



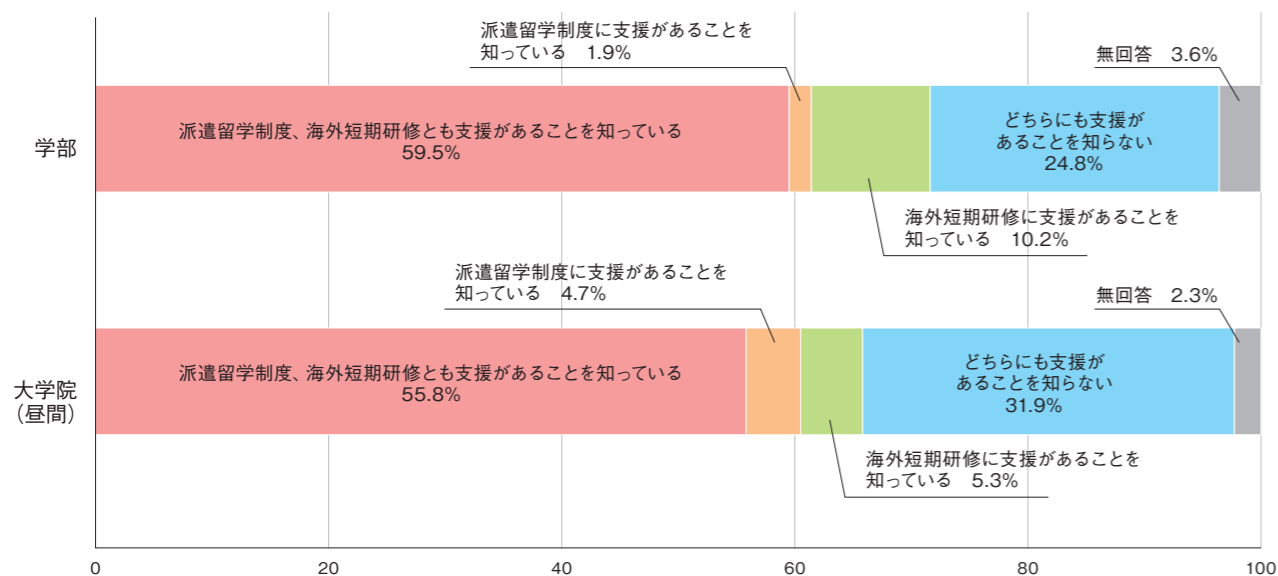
グラフ Q: 本学の留学生との交流はありますか。(留学生は日本人学生との交流について回答)



グラフ Q: 海外短期(語学、異文化体験)研修に行くとしたら、どの国・地域に関心がありますか。



グラフ Q: 本学が行っている派遣留学制度、海外短期(語学、異文化体験)研修に大学が経済的な支援をしていることを知っていますか。



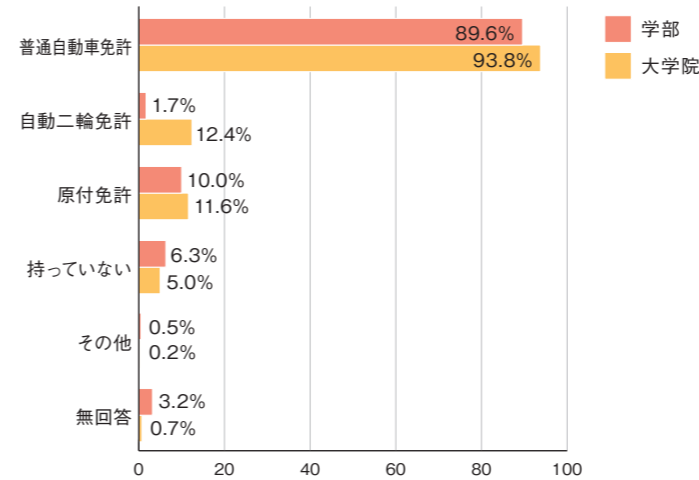
自動車等の運転免許の所有については、前回の調査とほぼ同様で9割近くの学生が普通自動車免許を持っている。ただ、学部生においては、普通自動車免許や原付免許の所有率が微減している。そのため何も持っていないとする学部生が増えている(今回6.3%、前回3.1%)。交通事故にあったかについては、全体で見ても5%弱であり、また前回の調査より微減している(今回4.9%、前回6.4%)。自由記述欄を見てみると多くの学生が学内に入ってくる十字路や学生寮の周辺で危険を感じたことがあると回答している。

学内での盗難・車上荒らし・居室への侵入などの被害については、件数も割合も減っている(今回3.2%、前回6.0%)。特に学部生においては半減している。しかし、学内の治安について不安を感じてい

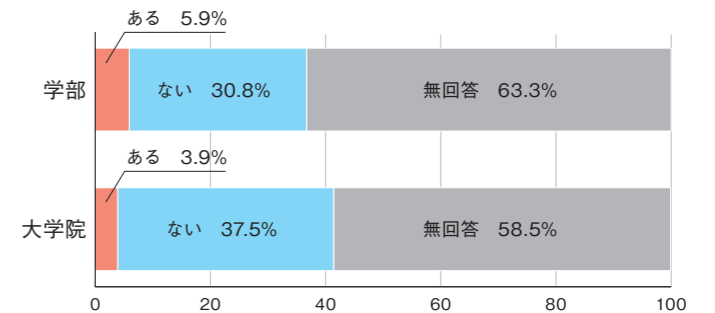
る学生数が上昇している(今回39.0%、前回33.5%)。具体的な自由記述からは、その多くが車上荒らしや学生寮などでの盗難被害についての不安である。被害の回答があった実数以上に、実際は多くの被害が発生しているのか、あるいは1つの被害について噂が広まった結果なのか、今回のアンケートからははっきりと断定できない。ただ、少なくとも学生が不安をいっている実態が明らかになった。

交通安全や防犯に向けた対策をしっかりと取っていくことが必要である。

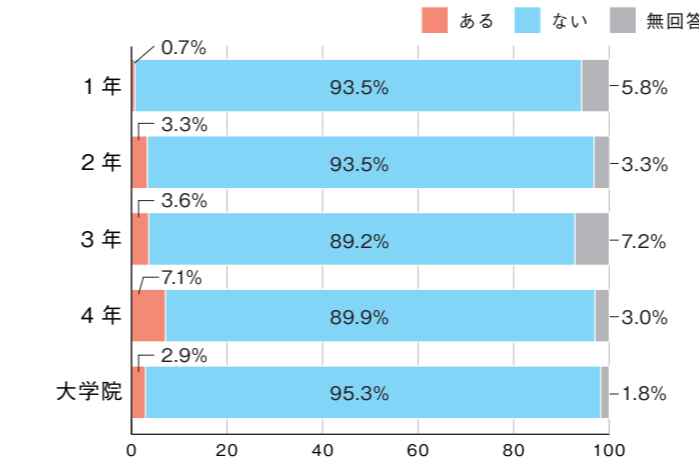
グラフ Q: 自動車等の運転免許を持っていますか。(複数回答可)



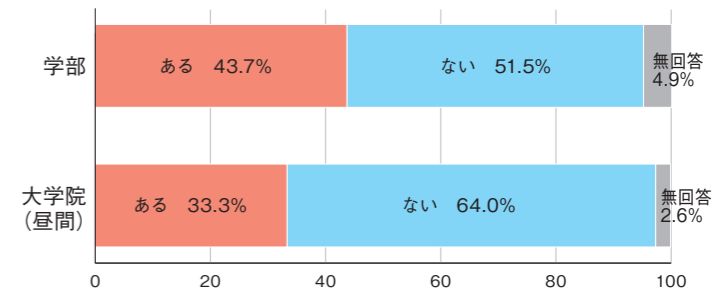
グラフ Q: この1年間(1年次生は入学後)で、自動車・バイク等を運転していて交通事故に遭ったことがありますか。



グラフ Q: 学内(学生寄宿舍を含む)で、盗難・車上荒らし・居室への侵入等の被害に遭ったことがありますか。



グラフ Q: 学内の治安について不安に思ったことはありませんか。





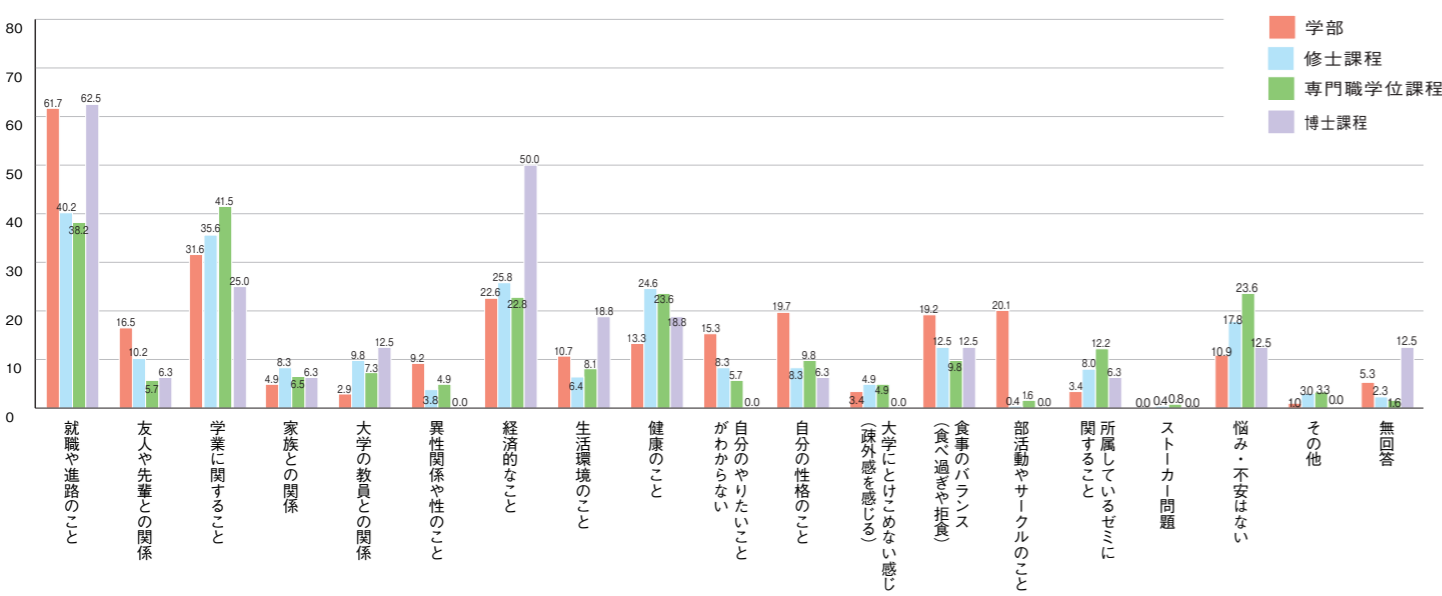
相談できる環境を増やすことが悩みの改善へ

今回の調査から、学生は就職や進路のこと、学業に関すること、経済的なことの順で気になっていることがわかる。2017年時の調査でも同様の傾向となっていた。その中で就職や進路のこと、自分のやりたいことがわからないといった項目は2017年時点より3ポイントずつ減少していた。

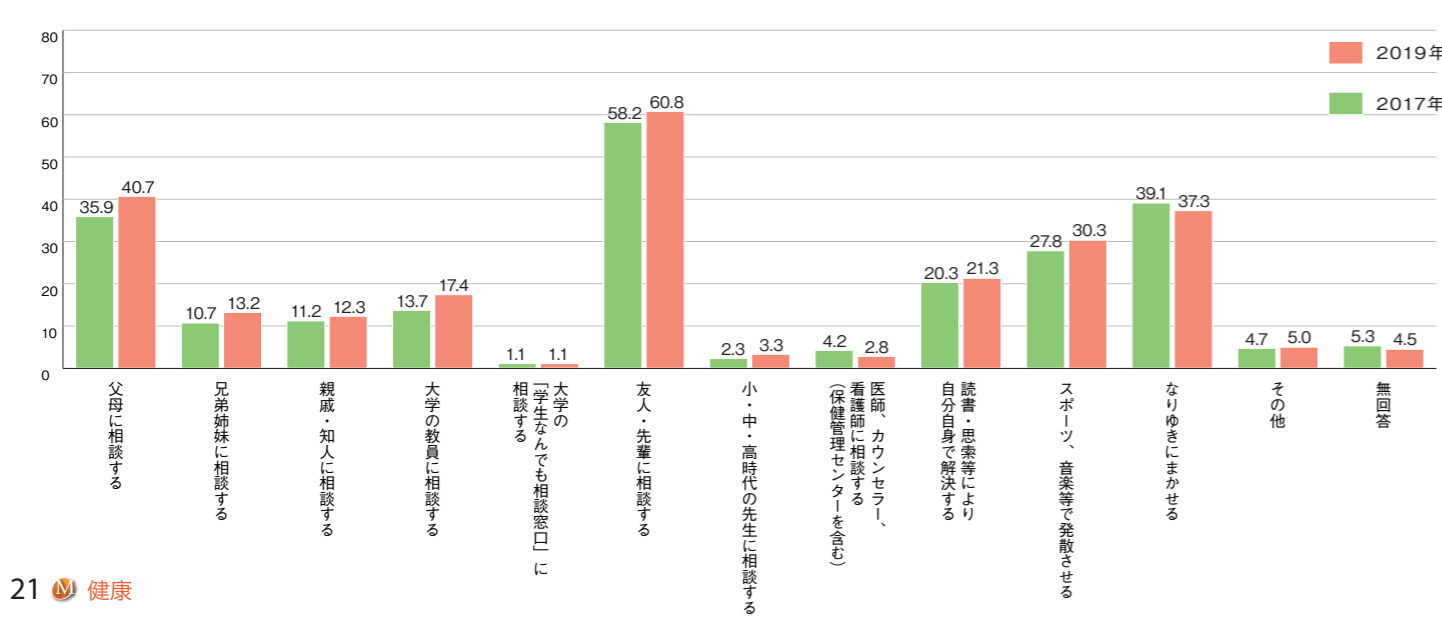
不安や悩みについて、学生が何かしら抱えている現状は2017年時の調査以降変化はない。また対処として、相談をする、自身で解決するといった対処は2年前に比べて増加しているものが多いことから、不

安や悩みを感じているという状態は強まっている可能性も示唆される。2019年度以前に導入されたクラス担当制の影響もあり、教員への相談の割合が増えていることが確認された。進路に関する悩みや自分のやりたいことがわからないといった悩みの減少もこの制度が影響している可能性も考えられる。このことから大学関係者が学生と関わる機会を体系的に増やし続けることは、学生の不安や悩みの解消につながりやすい可能性が考えられる。

グラフ Q: どのようなことに悩み・不安を感じていますか。(複数回答可)(パーセント、少数回答は除く)



グラフ Q: 悩み・不安が生じた場合、どう対処しますか。(5つまで回答可)



全学的なハラスメント対策の推進を

今回の調査においてハラスメントを受けたことがあると回答した学生が6%という結果になった。2017年時点の調査からその割合は変わっておらず、ハラスメントを受けたと認識している学生が学内にいることが明らかになった。自由記述においても、学生が記載した内容を大学も確認している。またハラスメントの相談窓口を認識している学生が全体の49%となっていた。

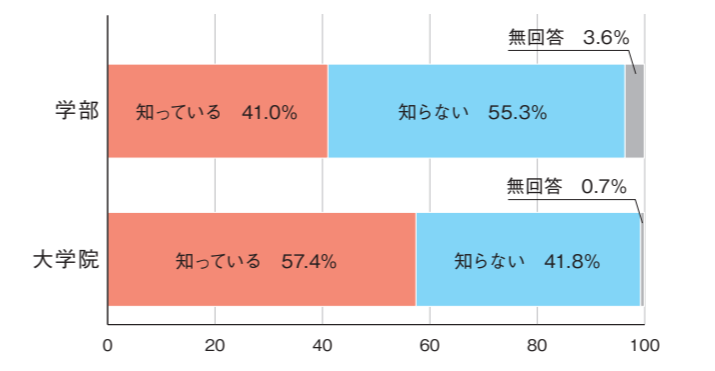
ハラスメントを受けたと回答した学生へ直接抗議をしなかった理由を確認したところ、不利な立場に追い込まれそう(2017年時26%、2019年時27%)、何の解決策にもならないから(2017年時10%、2019年時21%)という回答がそれぞれ増加していた。

またハラスメントを受けているのを見たり、聞いたりしたことがあるかという質問に対して全学生の7%の学生があると回答していた。

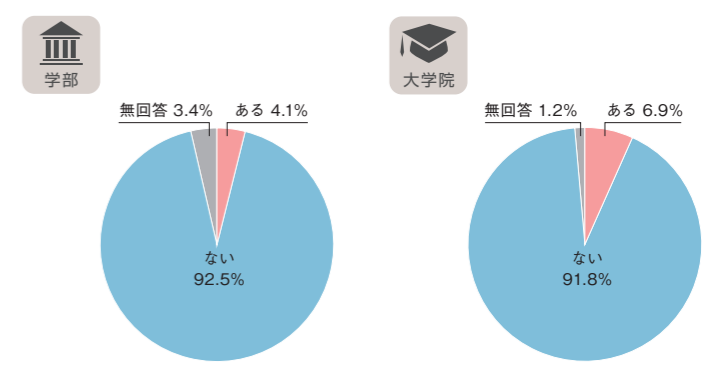
今回、回答していただいた複数の結果から、本学で学生が感じているハラスメントは少人数の環境の中で起こされており、相談して望ましい効果的な解決策が得られると認識されていないことが現状の一つとして考えられる。ハラスメント相談窓口の認識が学生間で2年間の間に増えていないことなどからも、窓口の周知とハラスメントに関する相談を行ったらどのような流れで大学側が対処してくれるかといった、具体的な対応内容などを伝え、相談することについて敷居を低くする取り組みを早急に進め実施していく必要がある。

またこの生活実態調査においても、学生側が回答した内容へ大学側が対応をしていく仕組みを作っていく必要がある。

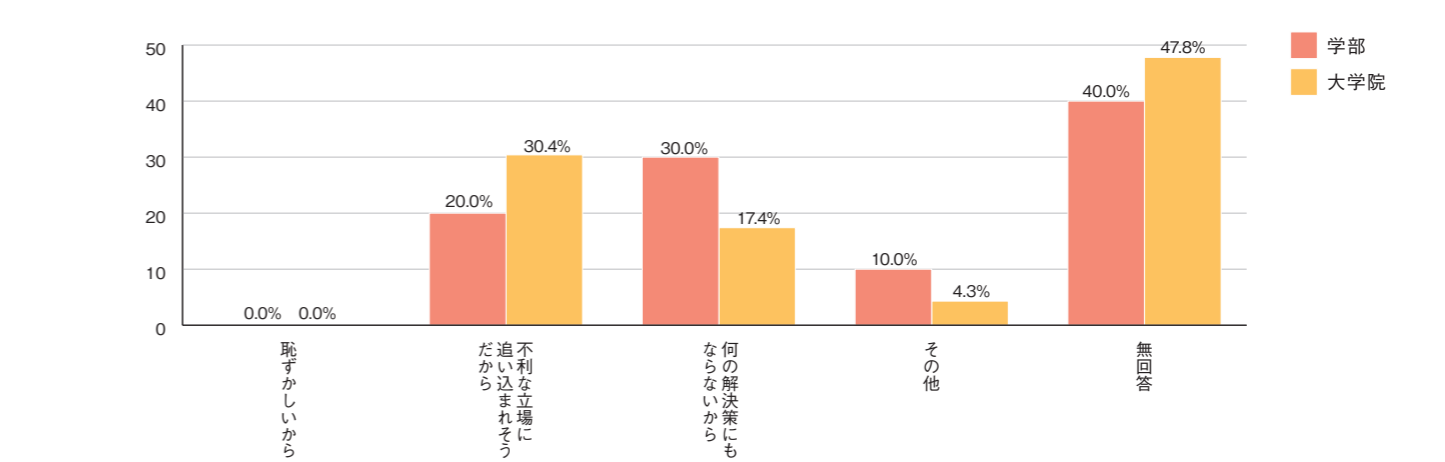
グラフ Q: 本学にハラスメントの相談窓口があり、相談員が置かれていることや学外の相談機関があることを知っていますか。



グラフ Q: 実際にあなた自身がこの学内でハラスメントを体験したことがありますか。



グラフ Q: 相手に対して直接抗議をしなかった、または誰かに相談しなかった理由は何ですか。



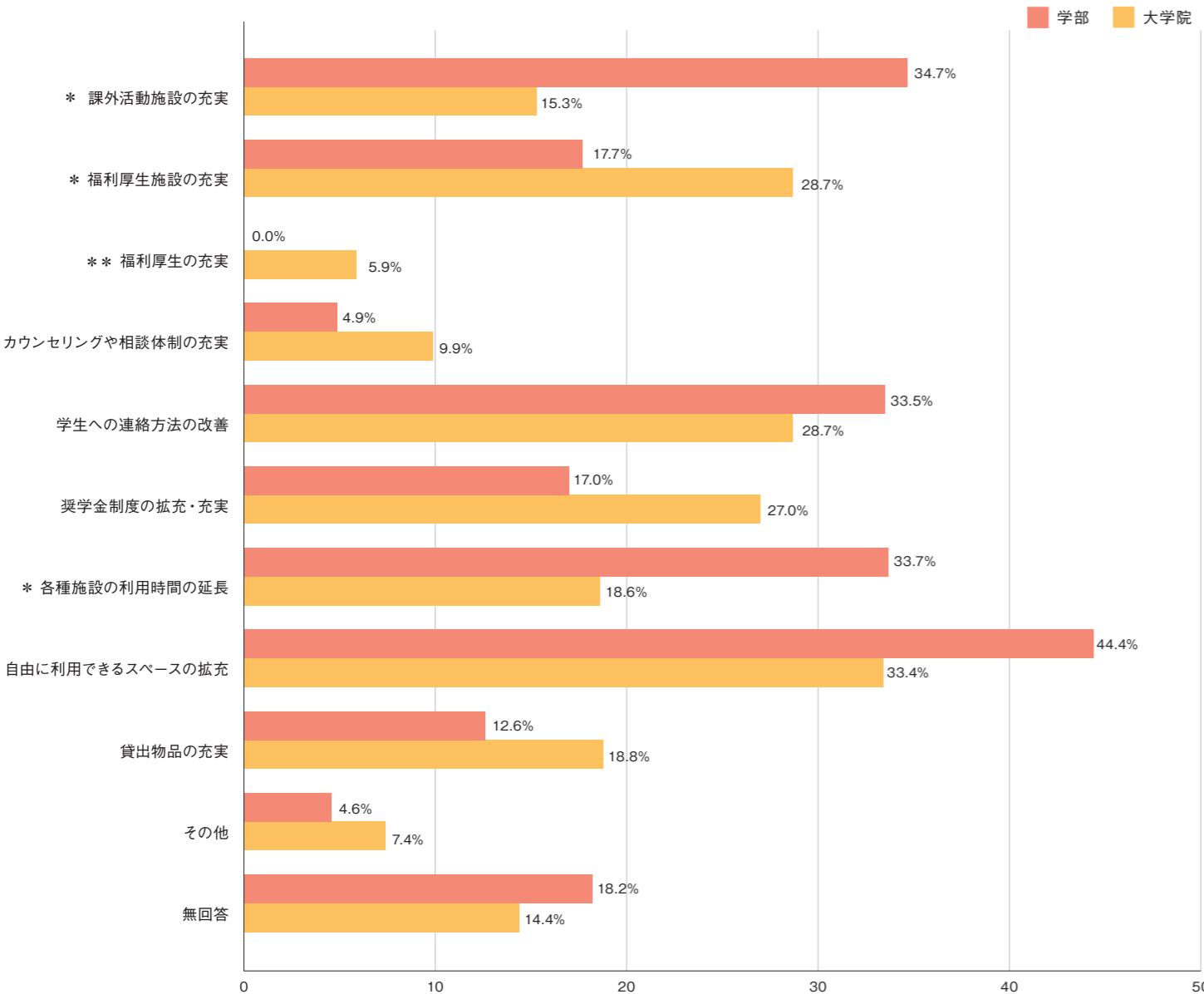


学部生、大学院生ともに自由に利用できるスペースの拡充

「大学に特に要望することや期待すること」について、複数回答で回答のあったものを集計したところ、学部生については、「自由に利用できるスペースの拡充」(44%)、「課外活動施設の充実」(35%)、「各種施設の利用時間の延長」(34%)、「学生への連絡方法の改善」(34%)、「福利厚生施設の充実」(18%)の順である。また、大学院生については、

「自由に利用できるスペースの拡充」(33%)、「福利厚生施設の充実」(29%)、「学生への連絡方法の改善」(29%)、「奨学金制度の拡充・充実」(27%)、「貸出物品の充実」(19%)、の順である。

グラフ Q: 大学に特に要望することや期待することは何ですか。(5つまで回答可) 大学院については、*は(昼間)のみ、**は(夜間)のみ回答



学部生

学部生の自由記述による回答を見てみると、

第1位の「自由に利用できるスペースの拡充」については、

- 空き時間に勉強だけでなく、友達と楽しく過ごせたりできる施設がほしい
- ご飯を食べられるスペースが食堂しかないため、他の教室も開放してほしい
- 自由に使えるスペースが少ない(自習室的なスペース)。講義棟などの空き教室を開放したらいいのではないか。(教採前は特に、勉強や模擬授業の練習で使いたい人があると思う)
- 図書館、食堂以外で集まる場所がほしい。
- 体育館利用を、もう少し柔軟にさせてもらえるとうれしい。食事スペースが少ないため、食堂以外にもフリースペースがほしい。

などが挙げられている。

大学の対応 学生の皆さんが、自学自習、グループ学習、歓談等自由に利用できて、飲食可能なスペースとして現在、総合研究棟1階学生ホール(利用可能時間: 平日の8:30~19:00)と大学会館のうれしの食堂(利用可能時間: 平日9:00~23:00、土日祝9:00~17:00)を設けています。この2か所は、一人用カウンター席のほかフリーWi-Fiを設置したりしてリラックスできる空間であるとともに自由に利用できる空間としています。

また、図書館では、PAO、オープンテラスのほか、ライブラリーホールは、平成30年4月に飲料の自動販売機を設置し、リラックスして勉強に取り組めるよう配慮しています。

このほか、自主的な学びのための共有スペースとしてラーニングcommonsを総合研究棟(オープンセミナールーム、キャリアセンター)、大学会館(アクティブラーニングスタジオ等)、附属図書館(PAO、グループラボ3室)に整備しています。

また、所定の手続きをすれば、学生交流室、多目的ホールや共通講義棟の各教室を、マイクロティーチングや研究、グループ学習、就職対策などに活用していただけます。

第2位の「課外活動施設の充実」については、

- テニスコート人工芝の補修をお願いしたいです。
- 運動場に日陰のスペースがほしい。
- クラブハウスのトイレをきれいにしてほしい
- グラウンドの整備をしっかりとしてほしい
- ソフトボール場、野球場にナイター設備がほしい
- 元Yショップの場所を利用できるようにしてほしい
- 野球場、テニスコートの近くのトイレをきれいにしてほしい

などが挙げられている。

大学の対応 課外活動施設については、今後とも教育研究施設の整備計画や安全面に配慮しながら、順次改善を進めていく予定です。なお、テニスコートの人工芝の補修については、学生の皆さんの安全面に配慮し、破損等の報告があれば、状況を確認のうえ、その都度補修をしています。

また、ソフトボール場及び野球場のナイター設備に関しては、大学の教育研究施設の整備計画等を考慮したうえで、令和元年度にLED照明を設置いたしました。

嬉野生活会館の元Yショップ設置場所については、令和元年度から、所定の手続きをすることにより使用が可能となっています。

第3位の「各種施設の利用時間の延長」については、

- 24時間の自習スペースをつかってほしい。
- Yショップ、図書館の土日の利用時間を延長してほしい
- 図書館を24h開放してほしい
- Yショップの営業時間を延長してほしい

などが挙げられている。

大学の対応 本学の各種施設においては、学生の皆さんからの要望を考慮するとともに、利用状況、施設整備及び警備上の観点から総合的に判断して、現在の利用時間等を決定しているところです。Yショップの営業時間については、大学側からお願いをしてサービスの改善を図っていますが、大学からの補助を考慮したうえでの採算性の問題で本学の規模では限界であることをご理解ください。

第4位の「学生への連絡方法の改善」については

- 絶対参加のようなものは、貼り出すだけでなく、メールも回してほしい。
- 水曜に何か説明会するなどの日程発表が、やや突然です。
- 警報などによる休講の際は、すぐに連絡が来るようにしてほしい。
- 臨時の講座などは、1ヶ月以上前に言ってほしい。

などが挙げられている。

大学の対応

現在、休講の取扱は、通学する学生各人の居住地における自然災害や公共交通機関の状況とは異なることから、これまでも学生の皆様には大学の休講の判断によらず、安全の確保を最優先に行動していただき、その際の欠席・遅刻等について授業での不利益を受けないよう運用しています。

また、計画的に実施される講演等については、原則1か月以上前に周知を図るように対応していますが、緊急性を伴うような集会、講演等については、可能な限り授業のない日時に設定し通知していることをご理解ください。

第5位の「福利厚生施設の充実」については

- 他大学のような「生協」がほしい。
- 食堂以外にもイートインスペースを設けてほしい。
- 食堂のメニューを増やしてほしい
- ゆうちょ ATM の再設置

などが挙げられている。

大学の対応

生協については、大学の規模の関係で契約ができないため、現在の業者と契約をしています。なお、食堂のメニューについては、低価格の単品メニューや日替わりメニューの設置、地域特産フェアの開催など、学生の皆さんの満足度向上を目指し、サービスの向上を図っています。

ゆうちょ銀行ATMについては、ATM設置存続指標である年間の利用件数が、最低基準を満たさない状況が続いたため、株式会社ゆうちょ銀行により平成30年9月に撤去されました。そのため再設置は難しい状況にあります。

大学院生

次は、大学院生の自由記述による回答を見てみると、

第1位の「自由に利用できるスペースの拡充」については、

- 図書館のパーソナルラボのように、1人で集中できる居場所があれば安心。グループラボの利用時間を拡大してほしい。
- 談話室、ラーニングcommons等、気兼ねなく声を出せる場所を拡充してほしい
- フリースペースの拡充、充実をしてほしい。
- 飲食可な、本を読んだり自習できるオープンスペースの拡充
- 体育館の使用を、誰もが気軽に利用できるような環境にして欲しい。(授業等、優先すべき利用以外で、利用する際の手続きの簡略化など。)

などが挙げられている。

大学の対応

「自由に利用できるスペースの拡充」は学部学生の「大学に要望することや期待すること」の第1位でしたので、P24の「大学の対応」をご覧ください。

第2位の「福利厚生施設の充実」については、

- トレーニング室を充実させてほしい
- ゆうちょ銀行のATMを再設置してほしい
- 自動販売機(パンやお菓子、カップ麺などの)を設置してほしい
- 生協の加入
- 食堂の価格を安くしてほしい

などが挙げられている。

大学の対応

トレーニング室の機材については、学生の皆さんからの要望を考慮するとともに、利用状況や安全面に配慮しながら、改善を進めています。

また、自動販売機(パンやお菓子、カップ麺などの)を設置について、業者等と交渉しましたが、採算性の問題で導入は難しい現状です。そのため、Yショップの営業時間内にお買い求めいただけますよう、よろしくお願いします。

その他の「福利厚生施設の充実」に関する大学への要望につきましては、学部学生の「大学に要望することや期待すること」の第5位でしたので、P25の「大学の対応」をご覧ください。

第3位の「学生への連絡方法の改善」については、

- 警報発令時の休講連絡など、メールで知らせてほしい
- 教室に到着してから休講が決まったり、突然日程が告げられたりする時が多いので、もう少し早く連絡してほしい

などが挙げられている。

大学の対応

「学生への連絡方法の改善」は学部学生の「大学に要望することや期待すること」の第3位でしたので、P24の「大学の対応」をご覧ください。

第4位の「奨学金制度の拡充・充実」については、

- ストレート学生向けの奨学金制度を拡充・充実させてほしい

などが挙げられている。

大学の対応

平成29年度には、ファーストオナーとして全国的な学会で行う発表に対して、申請によって奨励金を給付する「学会発表奨励金」、平成30年度には、優れた資質や能力を有する学生に対して、大学院に進学して学修や研究を行う機会を支援し、高度な専門性と実践的指導力を有した人材育成を行うことを目的として、本学学部を卒業後、直ちに学校教育研究科に入学した学生を対象に申請によって奨学金を給付する「兵庫教育大学学生奨学金」、特例制度(教員採用猶予)を利用して大学院学校教育研究科に入学した学生を対象に申請によって奨学金を給付する「特例制度利用者奨学金」を設け、就学支援制度の充実を図り、高度な専門性と実践的指導力を有した人材育成を行っております。

第5位の「貸出物品の充実」については、

- 自由に利用できるパソコンを増やしてほしい
- 貸し出しPCの導入。

などが挙げられている。

大学の対応

学内で、学生のみなさんが自由に利用できるパソコンは、図書館に23台、教職キャリア開発センター(通称:キャリアセンター)に4台のほか、学生支援課に貸し出し用ノートパソコンを3台配置していますので、ご利用ください。

以上、「大学に特に希望することや期待すること」について複数回答で回答のあった項目の回答数の多いものから、自由記述による回答があったものについて、大学の対応を記載しましたが、その他の記述として要望が多かったものに、カレッジバス(シャトル便を含む。)の増便等に関する要望の記述が学部生が全167件中28件、大学院生が全246件中13件ありました。

バスの運行にあたっては、皆様の利用状況や運行スケジュール及び予算等を考慮のうえ、決定しており、今回いただいた意見等も参考にしながら、利用学生皆さん全体の利便性を最大限高めるよう、努力しているところで。

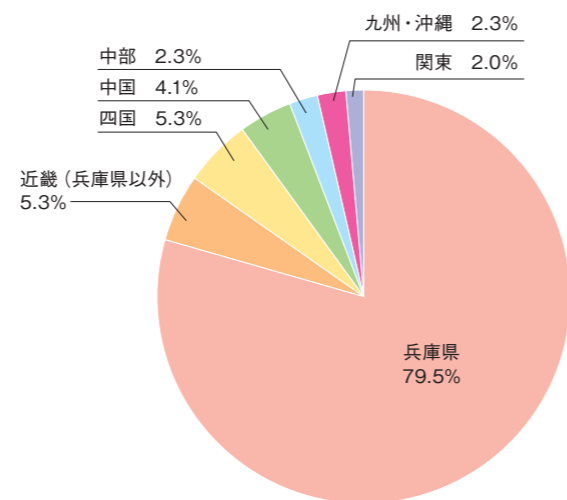
つきましては、今後の検討材料とさせていただきたいと思っておりますので、カレッジバス等の運行についてご理解いただき、ご利用いただけますよう、お願いいたします。

参考資料

入学者の地域別分布 (令和元年度入学者)

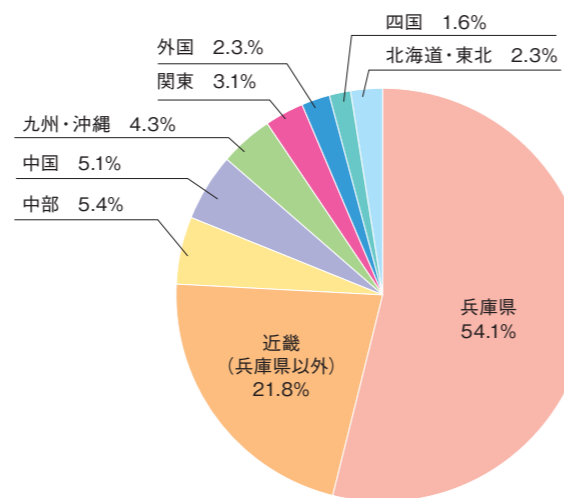


地域	人数(人)	割合(%)
兵庫県	136	79.5
近畿(兵庫県以外)	9	5.3
四国	9	5.3
中国	7	4.1
中部	4	2.3
九州・沖縄	4	2.3
関東	2	1.2
北海道・東北	0	0.0
外国	0	0.0
合計	171	100.0



大学院
修士課程
専門職学位課程

地域	人数(人)	割合(%)
兵庫県	139	54.1
近畿(兵庫県以外)	56	21.8
中部	14	5.4
中国	13	5.1
九州・沖縄	11	4.3
関東	8	3.1
外国	6	2.3
四国	4	1.6
北海道・東北	6	2.3
合計	257	100.0



令和元年度奨学金受給者数

日本学生支援機構奨学金

【単位：人】

学種・学年		第一種	第二種	学年計	学種別合計	奨学生割合	
学部	1年	32	23	55	224	32.7%	
	2年	46	15	61			
	3年	28	28	56			
	4年	29	23	52			
大学院	修士課程	1年	15	1	16	43	10.3%
		2年	20	7	27		
	専門職学位課程	1年	2	1	3	29	13.6%
		2年	16	6	22		
		3年	4	0	4		
	博士課程	1年	0	0	0	7	4.5%
2年		4	0	4			
3年		3	0	3			
合計		199	104	303	303	24.7%	

第14回 (令和元(2019)年度) 学生生活実態調査報告書

令和3年1月発行

編集 兵庫教育大学学生委員会

委員長 笠原 恵 (教育実践高度化専攻)

副委員長 松本 伸示 (教育実践高度化専攻)

委員 須田 康之 (理事・副学長)

池田 浩之 (人間発達教育専攻)

花輪 由樹 (人間発達教育専攻)

山口 忠承 (教育実践高度化専攻)

森田 啓之 (人間発達教育専攻)

足立 充 (教育研究支援部長)